



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学教育と現場の科学
Author(s)	米山, 喜久治; Yonryama, Kikuji
Citation	経済學研究, 56(4), 115-166
Issue Date	2007-03-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20024
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_56(4)_115.pdf



大学教育と現場の科学

米 山 喜久治

1. 問題提起

戦後日本の高度経済成長に伴う国民所得水準の上昇により家計における教育費支出の余裕が生まれた。高校進学率は、1955年に51.2%、1974年に82.1%となり1975年に90%を超えて91.1%、2005年には97.6%に達している。これと連動して大学・短大進学率も1960年の17.2%から1995年に45.2%、2006年には51.5%（70万3,191人）になった。特に1979年には工業生産品の生産管理の手法である統計的品質管理が、人間集団に応用されて第1回共通1次試験が、実施された。こうして生徒の諸能力を、ペーパーテストの成績における偏差値という単一の評価尺度で判定するシステムが、確立されたのである。以後日本人の持つ人間評価の尺度と軸が、単一化したのである。多様性、多元性が失われ、これが社会の「管理化」を推進する力となったと考えられる。

多様な仕事には、それに相応しい多様な能力が存在する。この「適性」が評価基準から外されたことが、その後の日本社会に与えた影響に注目すべきであろう。かくして学校制度という巨大な社会システムが、単一基準で管理、運営されることになった。平均的な能力を持ち、学費の経済的負担に耐えられる人が、「知的的好奇心」を動機とするのではなく、「学歴」を目的として進学し、大学の「大衆化」が進むことになった¹⁾。

2005年度には大学数726校、短大数488校、教員数も17万3,650人にまで増加すると同時

に全体で約3割の私大160校で定員割れを起こすに至っている。予想されていた「大学全入」が現実のものとなったのである。大学は、定員確保を優先するため高校レベルの基礎的学力を修得していない者の入学も認めざるをえない。このため学生の低学力化が、高等教育を困難ならしめる段階となっている²⁾。また学生は入学までに読書習慣を形成してこなかったため、講義で推薦された参考文献はもちろん教科書も読まない。彼らにとって書籍は単に古い情報であり、使い捨ての消耗品に過ぎないのである。書籍を手がかりにして「思索」することを存立基盤としてきた大学は、「世俗化」の波に沈み、その社会的機能である人類の知的遺産の継承も今や機能不全に陥ってしまっている³⁾。

2) 立花 隆(2002)『東大生はバカになったか』文藝春秋

ジャーナリストの立花は東京大学非常勤講師の経験を元に「日本の高等教育は恐るべき質的低下と組織的解体の過程にある。」「教養部の解体は、リベラル・アーツの壊滅」、「細分化による知の解体現象は、大学のような高等教育機関でこそとりわけ深刻」と指摘している。

瀬戸信幸・西村和雄(2001)『大学生の学力を診断する』岩波書店

「きちんと教育せよ」『週刊ダイヤモンド：役に立つ大学(特集号)』2002年5月11日号 pp. 32-33

3) 朝日大学では学生の社会的マナーの教育訓練カリキュラムである「社会と生活基礎」を開講している。

朝日新聞 2000年2月21日号。幼児期以来家庭内で「食育」を十分に受けなかった者のために大学で食育の機会を設ける必要が出てきた。「大学生よ朝食を」朝日新聞 2004年9月19日号「希望の大学に入りたい」のは日・米・中・韓の国際比較で29%と日本の高校生が最低である。大学への進学動機も弱くなっている。日本青少年研究所 2005年度調査 日本経済新聞 2006年3月2日号

1) 文部科学省(2006)『文部科学統計要覧』(平成18年版)

マルチン・トロウ/天野・北村訳(1976)『高学歴社会の大学』東京大学出版会

インターネット、ケータイ（携帯情報端末）の急速な普及は、現実世界に生きる感覚が希薄で自らの内発的な「知的好奇心」を基に学習行動が取れない学生を急増させている⁴⁾。バーチャルな世界に熱中して、自然やナマのものに直接触れること、さらには人との交流から離れて「情報」をのみ尊重する思考と行動様式が、一般化するに至った。オリジナルからコピーを作成して利用することに何の疑問も感じなくなり、その区別をする感覚は麻痺している。高度過密都市社会に情報技術（IT）が導入された結果、社会の構造的、質的变化が急速に進み、管理システムが砂のようにばらばらになった個人を直接的に管理する社会が実現しつつあるといえよう⁵⁾。

また大学における研究は、自然や社会や人間の「全体」に対する関心を失って、特定の断面を「分析」する専門化、細分化が進んでいる。「知識の断片化」が、幾何級数的に増大する「情報量」とリンクして不可逆的に進んでいる⁶⁾。

現場の事実から乖離して出所不明の第2次、第3次加工の断片の情報の乱反射が、激しくなっている。このため問題の出来るだけ歪の少ない全体像を描き、その構造を把握し本質を解明することが、困難となっている⁷⁾。

財政赤字のため教育予算削減を行い、競争的外部資金の導入が、文部科学省によって主導されている。だが基本的教育活動への予算配分は、顧みられるところがない。さらに国立大学の独立行政法人化を契機として大学の再編成、リストラが進みつつある。大学教員は“大学改革”と日常業務、研究業績達成に追われて精神的、身体的に荒廃しつつある⁸⁾。現代日本の大学の内実は、「大衆化」、「世俗化」、「情報化」、「知識の断片化」が、急速に進展している一方「国際化」には、見るべき成果を上げていない。IT技術による「仮想現実世界」の大爆発とは逆比例した精神の自閉化の進展は、今やコミュニケーション能力の低下と連動した知的能力を低下させるまでになっている。

21世紀日本の大学は、こうした諸困難に埋

4) 正高信男(2003)『ケータイを持ったサル』中公新書

秋田澤雄(2003)『テレビ画面の幻想と弊害』悠飛社

森昭雄(2003)『ゲーム脳の恐怖』生活人新書

柳田邦男(2005)『壊れる日本人』新潮社

岡田尊司(2006)『脳内汚染』文藝春秋

最近の学校における“いじめ”による生徒の自殺事件は、もはや人間の管理の極点である。これは「殺人工場」と称されたナチス・ドイツのアウシュビッツ強制収容所に匹敵する「自由な精神の抹殺工場」というべきではないか。

鎌田 慧(1983)『教育工場の子供たち』講談社文庫
J. リツア/植田訳(2005)『無のグローバル化』早稲田大学出版局

5) ジョン・ネズビッツは、アメリカのハイテク中毒の諸症状に関して次のような指摘をしている。

宗教から栄養摂取にいたるあらゆる分野で即効性の解決法に飛びつく。テクノロジーを恐れると同時に崇拜している。ホンモノとニセモノの区別があいまいになる。暴力をあたりまえのこととして容認する。テクノロジーを一種のおもちゃとして愛好する。人々が、孤独な集中できない生活を、送っている。

ジョン・ネズビッツ/久保田恵美子訳(2001)

『ハイテク ハイタッチ』ダイヤモンド社

6) 同一辞典でも、版が新しくなると項目が増加している。中山・金森・荒編(1971)『有斐閣経済辞典』(第1版)9,500項目、同編(2002)、『有斐閣経済辞典』(第4版)21,000項目

アメリカの大学における学問の専門化により学生が、戸惑っている実態については

Gerald Graff(2003)『Clueless in Academe: How Schooling Obscure the Life of Mind』Yale Univ. Press

7) 小松左京編(1996)『小松左京の大震災'95』毎日新聞社

星野芳郎・小川和男編(1996)『阪神大震災が問う現代科学』人間と技術

8) 「慶大、科研費不正受給。教授、停職3ヵ月処分」毎日新聞 2005年10月5日号

「捏造データで論文発表、阪大グループ、米医学誌に」朝日新聞 2005年5月19日号

「厚生労働省科学研究費不正受給罰則強化へ」日本経済新聞 2006年3月20日

(文部省からの私学助成金の不正利用事件)東北文化学園大学元理事長に8年求刑」日本経済新聞 2005年12月3日号

東京大学では論文疑惑問題で「研究行動規範委員会を常設」した。朝日新聞 2006年3月14日

没することなく「世界に開かれた公共空間」として異質の交流を通して知的生産により新しい価値を創造し、志高き有為の人材の育成を以って社会に貢献することが求められているのである⁹⁾。

2. 新しい大学教育のモデル

21世紀の日本は、IT技術が深く関与する高度科学技術都市文明の中にある。環境問題、エネルギー問題、食料問題などに加えて明治以降初めて人口が減少に転じ、急速な少子高齢化、過疎・過密化そして人間性の荒廃など世界の最先端というべき問題に直面している。しかし放置すれば解決の困難度は、増加する。諸問題を解決するための時間的余裕は、残されていない。日本人の直面する「先端的問題」の解決への実践は、人類史的なパイオニアワークの達成を意味している。大学は、問題解決の理念、方法、具体策に関する情報受信のキー・ステーションの機能を果たすべき責任が、あるといえよう。日本人の推進する問題解決の成功と失敗に関する情報は、世界に向けて発信され、共有化される必要があるだろう。これによって同種の問題に直面する世界各国諸部門における問題解決に貢献することが、可能となるであろう。人類の知的資産が、新たに創出されるのである¹⁰⁾。

明治維新以来欧米先進諸国に追いつき追い越すために「近代化」が推進された。1世紀にわたる懸命の努力により1980年代日本の製造業は世界のトップ水準に立ちえたのであった¹¹⁾。

しかしこの欧米モデルの導入、技術移転が最優先される歴史的過程では伝統的な技術・技能、文化は否定・軽視されてきたのであった¹²⁾。長きにわたるキャッチ・アップの過程で欧米崇拜と後進国型思考が日本人にとっては習性となってしまったのである。日本を欧米先進諸国に近づけるための人材育成を目的とした教育もまたこうした思考様式に縛られているのである。21世紀世界の先端的問題の解決に挑戦するためには、一人一人の潜在能力を開発し、その独創性を十全に発揮することが、必要である。そのためには、今こそキャッチ・アップの後進国志向からの脱却が必須の課題となっているのである¹³⁾。自らがおかれた状況から問題を発見し、その問題の解決に正攻法で取り組む知的能力と勇氣、情熱と責任倫理を持った人物の養成こそが、現代日本の大学教育の社会的使命である¹⁴⁾。

まず教育 (education) と訓練 (training) の区別を、明確にする必要がある¹⁵⁾。教育は、あくまでもその人の潜在能力を引き出すことであり、問題発見、問題形成、問題解決能力を開発して人間性を解放することである。こうした

9) 米山喜久治(1993)『探究学序説』pp. 88-89 文眞堂
ドナルド・ショーン / 佐藤 学・秋田喜代美訳
(2001)『専門家の知恵』ゆみる出版
加藤周一「新世代へ、価値を内面化し、良心に従う「自由な個人」となれ」『論座』2006年1月号

10) 米山喜久治(1993)『適正技術の開発と移転』文眞堂
西村 肇・岡本達朗(2001)『水俣病の科学』日本評論社

11) D. ルート他・沢田 博訳(1990)『リーン生産方式が世界の自動車産業をこう変える』経済界

12) 米山喜久治(1993)『探究学序説』pp. 16-17 文眞堂。
同(1998)「日本の技術者 技術の移転と伝承」『日本労働学会年報』(第27回全国大会)

13) OECD 調査団報告/文部省訳(1980)『日本の社会科学を批判する』講談社学術文庫

14) 米山喜久治(1993)『探究学序説』p. 89 文眞堂
阿部謹也(1997)「生き方問わない経済学」日本経済新聞 1997年10月22日号
エドムント・フッサー/細谷恒夫・木田 元訳(1995)『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』第51節「生活世界の存在」という課題 pp. 316-319 中公文庫

15) 元東京工業大学学長川上正光は、明治初年欧米の文物の翻訳における誤りを、指摘している。Teaching が“教育”であり、Education を“教育”と訳すべきではなかった。本来 Education は、その人の持つ潜在的能力を引き出すことである。それゆえ“啓蒙教育”略して“啓育”を Education の日本語に当てるべきであるとしている。川上正光(1978)『独創の精神』pp. 13-16 共立出版

内容を持つ人間行動は、「啓発教育」と呼ぶべきものである。標準的知識の伝達を目的とする教育 (teaching) とは、その内容が異なることを、認識すべきであろう。キャッチ・アップの歴史的段階では、標準的知識 = 確立されたモデルを、出来るだけ効率よく習得することが、重視される。「正確な記憶力」が、学生・生徒の能力評価の基準とされたのであった。ここでは主体的に自らの経験に基づき試行錯誤して、何かを作り出すことは、学校という「技術移転の場」では、マイナスの評価しか与えられないのである¹⁶⁾。

他方訓練は、生産現場の OJT が、その典型である。そこでは言語化されていない身体行動である「技」を、含む自然科学を基盤にした定型的な技術、技能の修得を目的としている。具体的作業遂行の正確さでその能力と習熟度が評価されるものである。

大学教育は、図 1 に示すように「専門教育」、
「教養教育」さらにその全体像の解明が進んでいない「探究学 (知的生産の技術) 教育」によって構成されている。三角形の各頂点に位置づけられる主として知識の諸領域に関する“啓発”教育に加えてその中心に位置して根本的に重要なのが、「人間教育」である。多様で多次元の刺激を与えて学生に人間的成長と自らの人生における志を立てることを促すことである。これは知識や技術の伝達によって行いうるものでは

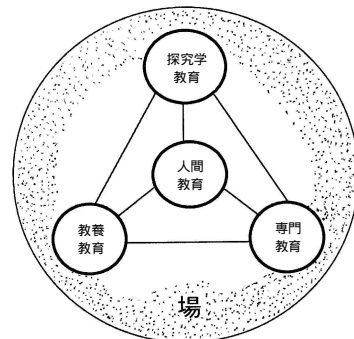


図1 新しい教育：人間としての成長を促す

ない。学ぶ者が、その道の先達の言葉と立ち居振舞いから自らの五感と直観を働かせ、身体感覚をもって感得するものである。そのための適切な場面の設営が、必要である¹⁷⁾。

教養とは、問題の全体像を把握すること、問題を重層的、多面的、多角的に把握するために不可欠な基軸となる基礎的知識である。問題の全体像を把握し、座標的知識の地図の中に位置づけて、解決する構想力を支える知的能力こそ「教養」というべきものであろう¹⁸⁾。

設定した課題に焦点を合わせながら自ら現場に立って自然やナマのものに直接触れて、そこから現場感覚に基づき観察、観測、調査、実験によってデータを作成する。そしてこのオリジナル・データを核にして関連する人類の知識遺産と知恵を組み立て、統合する必要がある。専門化、細分化、断片化された知識の組み立て、

16) 米山喜久治 (1998) 「日本の技術者 技術の移転と伝承」日本労務学会年報 (第 28 回全国大会) 司馬遼太郎 (1999) 『街道をゆく 本郷界限』朝日文庫
司馬によれば 明治期日本の外国文物を、移転するセンターであった東京大学は、「文明の配電盤」と表現されている。
『横須賀海軍船廠史』(原本大正 4 年刊)(復刻版昭和 48 年) p. 7 原書房
『横須賀海軍船廠技術官及職工教育史』(昭和 59 年復刻版) p. 22 風間書房
幕営の横須賀製鉄所 (後に造船所) では、日本人の作業者は、フランス人技術者、熟練工に対して自分の意見を述べるのが、禁止されていた。

17) 米山喜久治 (2002) 「一般教育 - 現場からの一試論 - 」『経済学研究』(北海道大学) 第 51 巻 4 号
清水博 (2003) 『場の思想』東京大学出版会
J.Lave & E.Wenger / 佐伯 胖訳 (1993) 『状況に埋め込まれた学習』産業図書
有効な OJT の実施には具体的な場と課題の設定が、前提条件となる。
18) オルテガ・イ・ガセット / 井上 正訳 (1996) 『大学の使命』玉川大学出版部
オルテガは、20 世紀の大衆化社会にある大学は、高度な専門教育よりもまず教養教育 (リベラル・アーツ) を中心にすべきであると根本的な問題提起を行っている。

統合、創造的な一仕事を達成するための方法論が、探究学（知的生産の方法）である。モデルを導入して模倣するのが技術移転の本質的契機であるとすれば、自主技術開発、手作りの新しいモデルの開発と構築を実現する能力は創造性に深くに関わるものである¹⁹⁾。

明治以来欧米先進諸国にキャッチ・アップする歴史的過程で強化されてきた文部省の主導する大学設置基準により各学部のカリキュラムが決められて、大学教育が行われてきた。標準的教科書（辞典、ハンドブック）に記載された知識（基礎概念）、技術を講義によって伝達し、ペーパーテストで評価して「単位」を認定する。試験に合格して所定の単位を取得した者は、「卒業」の資格が与えられる。こうした教育システムは、学生の一定水準以上の生活経験の質と量、さらには自主的な学習能力を、前提にしている。さらにはまた卒業後参入する各企業・職場での密度の高い長期的な OJT による具体的な技術、技能訓練によって初めて職務遂行能力を習得する機会が、与えられるのである。大学教育が、たとえ日本の現実社会を反映しない抽象的理論（輸入翻訳概念）を中心としたものであっても卒業後の各職場における OJT が、これを補完して、一人前の職業人を育成することによりキャッチ・アップを目標にした経済発展を遂げることが出来たのである。

それを可能にしたのは、自然と子供の頃からの地域社会における遊び集団その他の社会的経験の共有であり、低い大学進学率であったといえよう。しかし首都圏を中心に太平洋ベルト地帯への人口集中による巨大都市圏の形成により生活の周りの自然は、失われ、地域社会は、都市の中に再建されることがなかった。これに加

えて IT 技術による情報化が、人々の人間的交流を希薄化させたのであった。また大学・短大進学率も 50% に近づき、学習の目的を持たないモラトリアムの若者が、入学することになったのである。基礎学力が低く、知的好奇心も持たない若い人々が多数を占める大学は、もはや高等教育機関たりえず、本来の社会的機能から逸脱した精神的「難民収容所」ともいふべきものとなっている。そこは、人間精神を荒廃に至らしめる「現場の具体的事実に対応しない 2 次加工、3 次加工の情報」=「虚構」が支配する場であるといえよう。

このような「現場の具体的事実に対応しない情報」の暗記に終始し、単一正解を提示する教育では、学生の卒業後の社会生活、職業生活に必要なとされる能力の開発が、出来ない事は言うまでもない。自らの「原風景」、原体験を内に抱き、直面する問題を正視して、具体的な解決策を構想して、環境に創造的に適応しうる能力の開発こそが求められている。だが現状は人間的、知的諸能力を保証するものではない「学歴」、具体的な職務能力を保証するものとは限らない「資格」、さらには単一正解思考の結晶である「マニュアル」を、尊重する人間が大量生産されるだけである。その結果「七・五・三問題」といわれる大卒者の就職後 3 年以内 30% もの転職者が、出現し続けているのである²⁰⁾。大

19) 川喜田二郎 (1968) 『発想法』中公新書

川喜田は、科学を「書齋科学」、「実験科学」、「野外科学」に分けている。また「野外科学」と「現場の科学」を等しいものとして位置づけている。

梅棹忠夫 (1969) 『知的生産の技術』岩波新書

米山喜久治 (1993) 『探究学序説』文眞堂

20) 内閣府編 (2003) 『国民生活白書』 pp. 80-81 ぎょうせい

米山喜久治 (2004) 「大学工学部卒業者と長期雇用」『日本労務学会研究報告論文集』(第 35 回大会)

学歴、年齢、勤続年数を基準とする「年功的人事管理」が、バブル経済崩壊後の「新規学卒者」採用中止または、採用減によって、職場の経験年数別の人員構成を、いびつなものにしている。これによって若い人々が、いつまでも職場の最も単純で、負荷のかかる職務を担当させられている。適切な OJT の機会もなく、自らの職業生活の将来を展望できないため、退職、転職するという指摘については、

城繁幸 (2006) 『若者は、なぜ 3 年で辞めるのか』光文社新書

学3年生の時からスタートする就職活動が、貴重な学習機会、時間とエネルギー、経費を犠牲にして行われている。こうした高いコストを払った就職活動により得られた就業機会も、「自分にあった仕事」を見つけるためには簡単に放棄されてしまうのである。学生時代に挨拶に始まる基本的な社会的能力を身に付けていないこと、多様な社会的部門の人々との交流によって自らの職業観、社会観を形成し得なかったこと、さらには生きる目的が、不明確なままに留まっていることが、根本的な原因の1つではないだろうか。

少子高齢化さらには2007年問題といわれる団塊の世代の大量の退職時代を迎え、日本社会は、若い世代の一人一人に対して高い期待を寄せているのである。そのためには仕事及び職場とのミスマッチがもたらす計り知れない個人的及び社会的コストを、最小にすることが、必要である。個人には自らの能力発揮による職業生活における幸福の実現。そしてその貢献がもたらす環境保全と精神的に豊かな社会の再構築の道を辿ることが、大学卒業者には、求められているといえよう²¹⁾。

3. 教室を「現場」(フィールド)に転換する

大学における“啓発”教育の目的は、学生に多様な知的、人間的刺激を与えて、その人の人間的成長を促すことにある。では学生に多様な刺激を与え「気付き」と「内発的な感動」をもって主体的に学習する契機となりうるような“啓発”教育は、いかにあるべきか。少人数の学生グループを対象に対話形式で「古典」を精読する講義方式の有効性は、これまで多方面で議論されてきたところである。しかし未だ具体的な成果を上げたとの報告は、なされていない。現代の教室、演習室の容量以上の大量の学生を受け入れてマスプロ教育を前提に経営される大学にあっては、まず必要な教室、演習室の確保が、困難である。たとえ少人数のクラスが、編成されても、こうした方式の存立を、根底から否定するのは、学生の基礎学力不足と知的好奇心の欠如、低い自主的学習能力である。学生は、指定文献(文庫本や新書版)を購読しない。読書習慣が、形成されていないため図書館で文献を読むこともない。割り当てられた部分の学習と報告の準備を行わない。もっと問題なのは、

21) 米山喜久治(2005)「臨床実習生の現場適応」『北海道理学療法』第22巻

翻訳概念と抽象的理論の教育で標準的知識、技術の習得を強制された学生は、卒業後実社会への適応能力を失ってしまう。過剰訓練による無能化(Over-trained disability)が起こるのである。社長100人に聞くアンケート調査「社員の能力低下が業務に与える影響は?」「このまま続けば支障が出る」と50%が回答。

日本経済新聞社編(2003)『教育を問う』pp.80-81 日本経済新聞社

日本経団連会員企業2005年度新卒者採用アンケート調査 選考で重視した点(複数回答)コミュニケーション能力(75.1%)、チャレンジ精神(52.9%)、主体性(52.5%)、協調性(48.7%)

日本経済新聞 2006年2月27日号

オーストラリア1992年調査 Mayer Report があげる職場に効果的に参加するための7つの基礎的能力

情報の収集、分析、組み立て能力 コミュニケーション能力(アイデアや情報) 活動

の計画能力、組織能力 他人とまたチームで働く能力 数学的な観念や手法を使う能力 問題解決能力 技術を使える能力

Elisabeth Dune(1999)“The Learning Society” p.30 Kogan Page

基礎学力、社会的常識、マナーを身に付けていない「大学卒業者」には、ホワイトカラー労働への参入障壁が、大きい。非正規雇用の単純労働には、「学歴」が、不要である。労働市場は、明らかに大卒者の供給過剰である。新しい仕事を、自分の企画力、技術力で作り出せない人は、単なるシステムに依存する労働力に過ぎないのである。

米山喜久治(1996)「配置転換と能力開発」『日本労務学会年報』(第26回全国大会)

米山喜久治(2000)「現代日本造船業における技術・技能の伝承」『日本労務学会報』第2巻第1号 Lex Borghans and Andries de Grip ed.(2000)“The Over Educated Workers?” Edward Elger

報告当日に授業を、無断で欠席すること。これでは、授業が成立しないのである。入学を許可され、授業料を払っている者は、その授業（クラス）に参加する権利を有することは、誰の目にも明らかである。しかし学生としては、課題達成の義務を有することが、明確に自覚されていないのである。このような感覚を持つ人々を対象に、古典や関連文献の精読は、彼らの自主的な学習活動を、引き出す契機とはなりえないといえよう。

古典や文献の中の抽象的な言葉は、彼らがこれまで生きてきた世界とは、直接結びつかないのである。自らの生活世界と抽象的な言葉（概念、特に輸入翻訳概念）との乖離は、あまりに大きく、彼らにとっては、何の関係もない世界の話なのである。マンガやゲーム、ケータイで多くの時間を使い、読書時間を、ほとんど持たなかった人は、知っている言葉、自己を表現する言葉が、貧困である。従って自分の経験をベースに読んだ本から知った言葉を、手がかりにして抽象的概念に至る考えの道筋をたどることは、ほとんど不可能であるといえよう。

では彼らの知的好奇心に働きかける有効な刺激となるものは、何であろうか。それは、自然やナマのものに直接触れて、人間と直接交流する経験から、“あー、面白い”、“素敵だ”、“不思議だなー”、“なぜなの”というような言葉（感性的言語）を、発することから始めることであろう²²⁾。自らの経験を、素朴な言葉にして表現することこそ、知的好奇心が、働く最初のステップなのである。幼稚園や小学校教育の本質は、ここにあるといえよう。しかし管理された学校での「教育」は、教科書に書かれた知識の記憶中心であり、単一の正解の暗記に追われ

ているのが、現実の姿であろう。上級学校進学のために「知るべきこと」、「なすべきこと」を、いつも親や教師から与えられてきた人には、自分の知的好奇心を働かせることは、危険な道を、歩み出すことを意味していた。「自分は、こんなことが面白い」と話したい思ひは、心の奥底に仕舞い込まれて、ついには自分の好奇心を、表現し、働かせる機会を、持つことがないままに日々を過ごしてきたといえよう。

それ故高等教育機関であることを掲げた大学においても“啓発”教育は、学生の子供の頃から凍りついた心、錆付いた感性を、復活させることからスタートしなければならない。このステップを欠いては本来の目的である「学生の人間的、知的成長を促す」ことを達成出来ないといえよう。

自分の生活世界（経験）を捨象して、抽象的な言葉に一挙に飛躍して、そこから直接触れて経験したこともない世界を、理解するために考えを、巡らすということは、その人のぎりぎりの存在である「身体性」をも、否定していることを、意味している。このような空転する思考回路からは、生きるために必要とされるアイデア、イメージ、解決策、具体的行動を、導き出すことは不可能であるといえよう²³⁾。現代の大学教育が、陥った蟻地獄のような状況の根本的な原因の1つは、ここにあるのではないだろうか。

文献研究、書齋科学的アプローチは、現場の事実と具体的な経験から離れて「言葉」で「言葉」を理解する、すなわち「情報」で「情報」を、判断することにつながっている。「言葉」に身を委ねて、その世界に没入するのではなく、あくまでも自己の存在と経験にこだわりながら、書物に書かれている「言葉」の意味を考えることが必要である。一定の人間成熟と知的素養がなければ、言葉の意味を読み取ることには、

22) 米山喜久治 (1993) 『探究学序説』 pp. 155 ~ 163 文眞堂

SARA Delmont (1992) "Field Work in Educational Settings" The Palmer Press

中村雄二郎 (1992) 『臨床の知とは何か』岩波新書
河合隼雄 (1997) 『“臨床経済学”構築する時』
日本経済新聞 1997年10月24日号

23) 米山喜久治 (2003) 『イメージの形成と職業選択
理工系学生の事例研究』 『経済学研究』 (北海道大学) 第53巻第3号 2003年12月

困難が伴うことはいうまでもないであろう。豊かな人間性を育み、しなやかな思考力を回復するための、文献研究、書齋科学的アプローチには、厳しい前提条件が、存在していることを忘れてはならない。未だ志が、曖昧なままであり、向学心も定かではない学生にとっては、基本的知識、技術の伝達を中心とする講義は、よそよそしい無関係な世界の話なのである。唯一の繋がりとえば、その講義の単位を取得できれば卒業が出来ないという制約だけでは、ないだろうか。

こうした文献研究、書齋科学的アプローチの壁を、打ち破る鍵は、「現場の科学(野外科学)」の方法であろう。自然やナマのものに直接触れて、人間と直接交流する経験をベースに思考を進展させる方法である。「初めに言葉ありき」ではなく、現場の事実と経験から、思考をスタートするアプローチである²⁴⁾。

では大学の通常の講義に、どのようにして「現場の科学」的アプローチを、活用することが出来るのであろうか。1つの具体策は、言葉の世界に漂う教室を、現実世界に引き戻すことである。つまり「教室を“現場”に設営する」ことである。大学では、従来ゼミナール単位などの少人数による工場見学や企業訪問などが、実施されてきた。参加した学生は、人々の働く産業の現場に直接触れる機会を得て、マスコミ情報等によって形成されたイメージを修正して、自ら企業や経営に関するリアルな認識を、獲得することが出来たのである。

しかし工場見学は小学校以来の社会見学つまり遠足やピクニックと同一視されるきらいがある。そもそも事前の十分な準備(調査研究)が、必要であることを認識している学生は、限られ

ているといえよう。さらにはまた教員による学生の現場調査方法に関する基礎的訓練も、ほとんど期待できないのが、現状ではないだろうか。工場見学後のレポート提出が、課題とされることもあまりなく、たとえ提出されても小学校以来の社会見学感想文に留まるケースが、ほとんどであるといえよう。これでは我々の意図する「現場研究」のための能力開発に向けたOJTとなり得ないのである。

十分な準備をした企業訪問(工場見学)は、数学モデルによるシミュレーション等の論理演算訓練とは違い、自らが観察した現場の事実とヒヤリングの内容に基づき問題解決思考を訓練する最も有効な方法であろう。しかしこの方法は、大教室で一度に多人数の学生に向けて展開される授業の範囲内では、実現することはほとんど不可能に近いといえよう。まず多人数の見学者の受け入れをしてもらえる企業(団体)が、極めて限られていること、行程や、移動時間を入れると講義時間を超えてほぼ半日となること。さらに交通費及び実施中の安全確保などの問題が存在する。言うまでもなく1人の教員では、社会的訓練をほとんど受けてこなかった多数の学生は、烏合の衆ともいべきであり、その統率は不可能である。

大教室での多人数の学生を対象にする場合、実現可能なのは、教室そのものを「現場」(フィールド)に転換することである。それは教室を、日常空間から非日常空間に転化せしめることによって初めて可能となる「場」である。予定された時間と教室で教員が、決められたシラバスによって「単位」取得を目的とする学生に対して講義する場合は、ありふれた日常性の一コマである。また情報伝達しか行われない教室は、単純作業の場に過ぎないといえよう。最初から予期せぬ出来事が発生する余地を排除する場では、「気づき」や「発見」の機会は、原理的に存在し得ないといえよう。それ故「日常空間」から「非日常空間」への転換を実現するには、それに相応しい場面の設営が、必要とされる。日常

24) 米山喜久治(1978)「大学教育：現場からの一試論」『経済研究』(明治学院大学)No. 51
渡植彦太郎(1987)『学問が民衆知をこわす』農文協
Kriford Giatz(1983)“Local Knowledge” Basic Books

の講義とは違うシナリオ、登場人物、大道具、小道具を準備して、一期一会の精神を貫く場作りを実践することである。

現実的、現代的テーマを掲げて、大学外からそれに最も相応しい人物を講師(ゲスト・スピーカー)として招聘して、自由に語れる場を設営するのである。講師には社会的各部門の第一線で当事者として問題解決に取り組む自らの世界と人生を、十全に語ってもらうのである。「大学の知」は、論理性と体系性をもって「学問」としている。しかしこの「大学の知」は、現場の事実と経験によって問題解決を通して社会に貢献し得るか否かが、検証されなければならない²⁵⁾。

理論の出発点は、現場であり、その帰着点もまた現場である。大学の中核を形成する「専門家の知」は、「現場の知」と有機的関連性を持った時にのみ「生きた知」となり得る。そして「問題」をより広い視野に位置付けて、問題の全体像を提示した時、現実社会の具体的な問題解決に貢献することが可能となる。体系性、論理性を特徴とする「大学の知」は、趣味としてそれを学ぶ者には、知的満足を与えるものであろう。しかし社会の現実的問題を指向して、緊張関係に立たなければ、それはあくまでも1つの観念体系に過ぎないのである。学生には、「現場の知」によって生きる人物との出会いは、これに「気づく」契機となり得るのである。

実務界に生活の根拠地を持つ実務家にとっては大学のキャンパスと教室は、非日常的空間である。また講師として学生に語る事は、ある程度の緊張を伴う1回りの非日常的行為である。他方学生にとっては、決められた教員による通常の講義とは違い、講師の存在と物語は、その人間的、知的刺激によって教室が、たとえ短時間であっても一期一会の非日常的空間に転化することを意味している²⁶⁾。フィールドワークの

基礎的な素養があれば、五感と直観を働かせて、イメージすることにより、「教室」をインタビュー調査の「現場」、問題発見の「現場」として位置づけることが可能となる。自然であれ、モノであれ、人間であっても、その理解には論理的思考力以前に感性とイメージ力が、重要かつ不可欠な役割を果たしている。講師の人間性と物語に五感と直観を働かせて共感、共鳴できれば、自分もその場に参加している現実によって「現場感覚」が、回復される。

またこの現場感覚は、どこにもかかわりを持たない漂泊する精神の状態から脱却するスタートラインに立ち、提起された問題をわが事として受け止め、関係者と協働して、その解決に向けて主体的に動く姿勢を取ることへと導いてくれるのである。

啓発された内容に関するノートテキング、記録作業は、頭脳への「手による情報の入力」である。思考のホームポジションにおいて「わが事として考える」ことは、異なる現象の底に秘められた本質に等価性を発見し「等価変換」を行うことである。そして自ら思考し、新たに発見したことを、情報として出力する「手作業」は、学習の「身体感覚」を回復せしめ、これによって現場感覚の修得が、可能となる²⁷⁾。

4. 北海道大学経済学部におけるプログラム

()「産業論」集中講義

北海道大学経済学部では、1980年代以来筆者の企画・運営による学部科目『産業論』(集中講義)を開講してきた。企業(団体)の第一線の実務家(経営者、管理者)を講師として招聘するものである。1984年の「鉄鋼業」(戸田

27) 市川亀久弥(1970)『創造性の科学』日本放送出版協会

石川九楊(1995)『書字ノススメ』「見失った手」pp. 181-184 新潮文庫

フランク・ウィルソン/藤野邦夫・古賀祥子訳(2005)『手の500万年』新評論

25) 米山喜久治(1993)『探究学序説』p. 155, 161 文真堂

26) 米山喜久治編(1993)『総合電機産業論 北海道大学1992年度集中講義要録』p. 264, 北海道大学経済学部

表1 「産業論」集中講義実績(企画・運営 米山喜久治)

1984年7月	産業論集中講義「鉄鋼業論」	(日本鉄鋼連盟 戸田 弘元氏)
1985年7月	産業論集中講義「自動車産業論」	(日産自動車 川原田 茂氏)
1986年7月	産業論集中講義「国際経営」	(太平洋金属 大岩 泰氏)
1989年2月	産業論集中講義「公企業経営と地域開発」	(池田町助役 大石 和也氏)
1990年7月	産業論集中講義「化学産業論」	(三菱化成 斉藤 昌二氏)
1990年10月	連続講義「現代の産業と経営」	(北海道工業大学 松本 正学長他)
1992年2月	産業論集中講義「食品産業論」	(味の素 馬屋原 一郎氏)
1992年7月	産業論集中講義「総合電機産業論」	(日立製作所 小林 哲雄氏他)
1993年7月	産業論集中講義「航空産業論」	(日本航空調査部長 永田 光輝氏)
1994年12月	産業論集中講義「情報産業論」	(日本IBM 後藤 治夫氏他)
1995年7月	産業論集中講義「テクノストレスとメンタルヘルス」	(国立精神保健研究所 丸山 晋氏)
1996年7月	産業論集中講義「現代日本の労働市場と雇用」	(三菱エイブル 高橋 昇氏)
2002年7月	産業論集中講義「世界貿易政策論」	(東北大学大学院教授 戸田 弘元氏)
2003年7月	産業論集中講義「沖縄の内発的発展」	(沖縄県亜熱帯総合研究所 喜屋武 臣市氏)

弘元氏)に始まり、主要産業と地方自治体経営、メンタルヘルス問題さらには労働市場の変化と雇用問題、地域の内発的発展の可能性を探る2003年「沖縄の内発的発展」(喜屋武臣市氏)まで合計14回に及ぶものである。開催年月とテーマ及び講師は、表1に示す通りである²⁸⁾。

「産業論」集中講義の企画の基本方針は、次のようなものであった。この文章は1992年度「総合電機産業論」講義要録を、編集・出版するに際してまとめられたものである。「明治維新の志士たちの悲願であり、明治以降の国家目標であった「欧米先進諸国に追いつき、追い越せ」は、第二次世界大戦の敗戦による廃墟の中に灰燼として潰えたかのように思われた。

しかし日本は傾斜生産方式の産業政策の実施により復興の端緒をつかみ、東西冷戦構造の中に幸運にも経済成長の機会に恵まれたのであった。主としてアメリカからの資本、技術の導入と発展途上国からの工業用原料と原油の安定的・安価な供給、さらには生産された工業製品に対して外国市場が開かれたことが、日本人の勤勉性を基礎として戦後日本の経済の高度成長

を可能ならしめたのであった。

経済復興と経済成長のためにマクロ国民経済レベルであらゆる資源(資本、原材料、エネルギー、労働力、土地など)が、最優先に配布された。臨海地帯には大規模コンビナート、内陸部には高度機械組み立て工場が続々と建設され、1980年代に立って遂に日本は、世界の最高水準に立つ「世界の工場」としての地位を確立することができたのである。ここに明治の志士たちの悲願は達成され、導入技術に磨きをかけて開発された生産技術は、世界のトップ水準にある。都心の立派なビルとオフィス街に加えてハイテク技術を装備した工場群は、経済大国日本の象徴である。

だが生活に目を向けると狭い住宅に工業製品を所狭しと並べてみても、なんだか心は寒々としているのが、現代日本人の心象風景ではないだろうか。かつてエコノミック・アニマルと軽蔑され、最近では血税の中から巨額のODAを行いながらも尊敬されない日本と日本人。貿易収支の黒字は世界1位が続いているが、どこからともなく足元に忍び寄る不安がある。

持っているモノの量を競い、ものに埋もれて、ものに振り回されているのでは、人間としての誇りを持って生きることはできないのである。戦後の日本人が経済的繁栄を追求することに夢中になるあまり、捨て去ってきたものは、たゆたう

28) 「“ワイン助役”が集中講義」北海道新聞 1989年2月7日号
米山喜久治(1990)「日米合併でシャトル便を」北海道新聞 1990年10月27日号
「エア・ドゥ黒字 96年創業以来初めて、全日空との提携が効果」朝日新聞 2004年6月5日号

時の流れる中にのみ可能である人々や自然との豊かな交流ではないだろうか。

激変する環境の中にあっても自らのアイデンティティーと誇り、さらには生きる勇気を内面から与えてくれるものは、懐かしい故郷の自然や風景として伝統文化であるだろう。しかし戦後の激しい都市化と社会変動により日本人はついに“故郷喪失の民”となってしまったといえよう。

消え去ったものをいたずらにいとおしんでみても、それによって新たな命あるものが生み出されることはない。我々にとって重要なことは、新しい広場を創造し、異質なものの交流が生み出すプラズマからあらゆるものの再生のエネルギーを取り出すことである。

そしてこのエネルギーによって輝きを失ってしまった伝統文化に人類の普遍的な文化の一翼を担う新しい命を与え、21世紀に向けてのルネサンスを実現することである。

現代の大学に課せられた使命は一人一人の人間には、その内面から生きる自信を与え、地球規模の危機を克服しうる新しい人類文化の創造の場となることである。大学は世界に開かれた公共の器として教育・研究をその基本的機能とする知的コミティーであることが求められているのである。

だが戦後日本の大学は、量的拡大のみが重視され、その内発的な発展の道が閉ざされてきた。その使命を達成するに必要な資源を配分されることもなく疲弊し、今日“構造不況業種”とまで揶揄される状況に立ち至っている。大学再生の道は真理への畏敬の念を堅持し、地球環境と人類社会への貢献を行う理念と方法と具体策を構想することである。

国際的にも、国内的にも社会的異部門間の交流の広場としての役割を担い、新しい価値を創造し、それを作品化し、情報として発信して、人類の社会的共有財産とすることに努めることである。

これによって大学は膨張して止まない経済活動の単なる産業予備軍の収容所であることが

ら脱することが可能となるであろう。

20世紀末の人類社会の大転換期を迎え、日本の大学はその存在意義を根底から問い直される現代にあって、学外の非常勤講師をお招きして開講する「産業論」は、単なる産・学交流を意味するだけではない。講義は情報伝達が行われ、情報が共有されるプロセスにとどまらず、講師の全人格を通して伝えられるメッセージに共感し、共鳴し、共通の認識に達した問題の解決に向けた協働の精神を陶冶する場である。

受講した若い学生には、講師よって提起された問題への真摯な取り組みによって、自らの生きていく道を発見し、志を立てることが可能なのである。」と²⁹⁾。

各集中講義とも受講学生には、講義終了時点でその日の講義に関するコメントを、400～500字程度にまとめて提出することが課題とされた。

講義の専門的知識の理解度は、通常のテストが、実施される場合もあったが、毎日の講義終了時に提出したコメントを、まとめてレポートを作成して提出した。これによって単位の認定が行われた。

1993年度の「情報産業論」(日本IBM後藤治夫氏、山岡齋氏、小澤弘道氏他担当)集中講義では、毎日の講義終了後その日の講義から、何を学び、どのようなヒントを得たのかを記す400～500字程度のレポートの提出が、課題とされた。講義全体への自由記入のコメントで、明確に自己の意見を述べたものは、次の通りである。実務家を講師として招聘する「産業論(集中講義)」への評価は高く、今後も積極的な展開への希望の表明を、確認できた。

1993年度 産業論集中講義「情報産業論」受講学生コメント

- 1)非常に興味深いものだった。今まで大学の講義で受けたことのない分野だったので新鮮だった。(4年MK)

29) 米山喜久治編(1992)『総合電機産業論』p.264
北海道大学経済学部

- 2) 注目度の高い産業界におられる方の生の声が聞ける企画で良い機会となった。(4年AK)
- 3) 会社の第一線で活躍される人を講師として迎えたという点で興味深く受講できました。(4年MK)
- 4) 大変タイムリーでよいと思う。特にIBMは世界最大のコンピューター企業であるが、この世界の巨人が、あるソフト会社に追い越されていることを知って、ますます講義に関心を持った。(4年YT)
- 5) 実際の社会の第一線の人の生の声が聞ける数少ない機会なので非常に良いと思います。(4年IT)
- 6) 集中講義の内容のように、現実の社会に対応した授業というものを取り入れたら、学生たちももっと社会情勢に興味を持つだろうし、就職という社会の一員として責任を持たなければならないことを考えたら、やはり通常の授業では学べないような講義を特別に設置してほしいと思う。(4年TK)
- 7) 自分としては未知の分野ただだけに興味を最後まで失うことなく受講できた。(4年IM)
- 8) 最先端分野の産業について現場の人の声を聞くことができたのはいい経験になった。(4年UR)
- 9) 今回のように理論の世界だけでなく現在の動向をその現場の管理者による話を聞く機会を増やしてほしい。(4年IA)
- 10) 学部の授業ではなかなか実経済に触れる機会は少ないので、集中講義は貴重な場だと思う。(4年SK)
- 11) 普段はあまり接することのないテーマ、話題で、新鮮で興味深く聴くことができた。それぞれの先生が、生きている資料といった存在で、企業の前線で活躍されているという活力にみなぎっていたと思う。また説明も理解しやすかった。(4年SA)
- 12) 私が今まで経験した中で最高の講義だったと思う。普段経営学の講義で聞いたことのある「言葉」などが登場しても、その重さが明らかに異なっていた。実践している人たちの素晴らしさを感じることができた。皆さん素晴らしい方ばかりでした。自分のついでに業務に誇りを感じていらっしゃるのではないのでしょうか。特に後藤先生は心から自分の行っている仕事を愛していらっしゃるように見受けられました。技術屋さんとしての魅力を強く感じましたし、講義もその思いが發揮されていたように思われます。(4年MM)
- 13) 産業構造の変化に伴うサービス化、情報化がいわれる昨今において、興味深いテーマであると同時にIBMという第1戦の現場の声を聞くことができる企画はとてもよかった。(3年TD)
- 14) いつも普通の講義で理論的なことを中心にやってきた分、現実社会に即したテーマは新鮮でよかった。(3年SK)
- 15) 大変分かりやすく大変楽しかった。企業の最前線で働いている方々のパワーの強さを感じられた。(3年SK)
- 16) 非常に速いテンポながら情報産業の展開がよく分かった。これからの集中講義も各業界の最新情報をリーディングカンパニーの方々の直接経験からくるお話を聞きたい。はっきりした口調で分かりやすい言葉で説明して下さって、コンピューターに疎い私にもよく理解できた。(3年MK)
- 17) 僕はコンピューターの知識はほとんどないけれど楽しかった。コンピューターに対する考え方が大きく変わったのは確かだ。(3年HT)
- 18) 講師、実際に現場で働いておられる方の話は、大学の教授の話とは全く違っていて、新鮮味が感じられ興味深いものだった。もっとこのような機会を設けてほしいと感じた。(3年NT)
- 19) どちらかでいえば理論分野の授業が多いので、もっと社会や企業に出てから使えるよう

- な実戦的な授業を増やしてほしい。今回の集中講義のように企業の人をもっと呼んでもらえれば、もっと関心が持てると思います。(3年ST)
- 20) 企業で実際に活躍している人が来てくれたのはとてもいいことだった。(3年NT)
- 21) 情報産業論というテーマは普段の経済学部にはない分野で、現実の生活に近い内容だったので大変よかったと思います。講師のみなさん素晴らしい方々でした。(3年NN)
- 22) これからの情報産業の必要性、重要性を考えるとタイムリーなテーマだったと思う。1人の講師ではなく多数の講師で行われたのでそれぞれの分野のエキスパートが講義をしてくださりとてもよかった。(3年TY)
- 23) 現代社会のひとつの重要なトレンドを、リアルタイムの情報として提供してくれて普段とは全く異なった視点で興味深く聞くことができた。第一線で活躍されている方々ばかりでしたので、いつものテキストの中の現実社会とはかけ離れた授業ではなく、いま現実で起こっているまたは起こったこと話してくださった。(3年NH)
- 24) 情報化社会といわれる中で情報という言葉だけが独り歩きをしている感じだったので、その情報化をテーマとしたのは非常に興味深かった。講師には現場にいる方がそれぞれの立場からお話しをしてくださって面白かった。また難しい話を私たちにも分かりやすいようにかみ砕いて整理して教えてくれたりし、どの講師の方も聴きやすくよかった。(3年KT)
- 25) 講師は、実際に情報産業界で活躍しておられる方だったので、現状について臨場感のある講義だった。またユーモアを持ち合わせていらっしゃる講師の方もいらっしゃったので安心した。(3年KE)
- 26) 学者の研究した理論ではなく、社会の前面において現在まさに市場を相手に闘っておられる方々の講義である点非常に新鮮味を覚えました。(3年KA)
- 27) 現実の産業構造における新しい流れを体験できた気がして興味深かった。実際の社会の中で実際にご自分の目で情報化の流れを見てきた方たちばかりなので、やはり通常の大学の講義とは違い「今」というのを具体的に感じることができた。(3年KF)
- 28) 個人的に非常に興味あるテーマだったので聞きやすかった。普段の経済学部の講義にはない雰囲気新鮮に思いました。(3年MA)
- 29) 皆個性的で面白い講師ばかりでした。自分の生きている業界に自信を持って話しているので、聞いている方も今現在の情報産業を肌で感じられたことに感謝している。(3年TM)
- 30) 話の内容がわかりやすく面白かった。理論だけでなく具体的な企業名や実践的なこと扱っていたので親しみやすかった。(3年NM)
- 31) 企業の現場で働いている方々の意見を聞くという企画と現在最も発展性のある業種についてのテーマがよかった。講義中ずっと同じ先生ではなく、何人も人が来て少しずつ違った話をしてくれて面白かった。また生産者側の人だけでなく、ユーザー側の話もしてくれたのでよかった。(3年YK)
- 32) 最新の情報最前線で働いている先生たちが、今回多分野にわたり詳細に指導してくれることは大変ありがたいと思います。現実の情報産業のトレンドをわかりやすく教えていただけるので社会の流れをよくつかめると思います。(3年KM)
- 33) 講師、実際に現場に臨んでいる人が自分たちの分野の内容について講義してくださったので、現実的であり分かりやすかったと思います。(3年YA)
- 34) 今回の集中講義では、私が当初予想していた以上の収穫があったと実感している。情報産業の基礎から最新までの内容はもちろん企業人の方々の実体験から作り出されたメッ

- セージ、マインドには感銘を受けることが多かった。4日間聞いたことすべてを忘れたくないと思っている。これからまたこのような貴重な時間を大学がわれわれに与えてくれることをひたすら祈っている。(3年FW)
- 35) 企画、テーマともに現在注目されている情報化社会というタイムリーな内容であり、経済学部生として学ぶ我々に重要な講義だったと思う。講演してくださった方全員が、それぞれの専門から切り込んだ貴重な内容を話してくださった。(3年IM)
- 36) 現代の高度に発展した情報化社会の抱える課題とこれからの潮流を学ぶことができ非常に有意義なものであった。企業の方が実際に積んでこられたこれまでの経験を交えての説明は興味深いものであった。(3年WT)
- 37) 情報産業自体が著しい成長を遂げた時代が過ぎ、日本IBMという現場の方々が自己を顧みながら講演していただくことで、われわれにも冷静に情報産業を概観できてよかったと思う。講師の方々はそれぞれ工夫した授業を展開していただいたと思う。(3年SU)
- 38) 情報産業の今の状況や課題など興味深いテーマでよかったと思う。話がわかりやすく聞きやすかった。また情報産業に携わっている企業からの視点や企業内で直面している現状が聞いたのは有意義だった。(3年NA)
- その他の「産業論(集中講義)」に対する受講学生によるコメントの代表的なものとして「抽象的、理論的な大学の通常の講義に比べてはるかに面白い。」「大学が、北海道にあるため東京を中心としたビジネスの実態が、よく解からないが、第一線で活躍されている方からお話をうかがい、現実感を持って理解することが出来た。」「実際に社会人として活躍しておられる人に直接触れることで、社会人として仕事に対する責任感や自分を高めていく努力が、とても重要であるということ強く感じた。」「自信と誇りを持って仕事に取り組んでおられる。」「自分があらゆる意味で未熟であることを

認識した。」「社会に出た時に必要とされる能力の基礎を学生時代に身に付けておきたい。」などが上げられる。実務家の講師を招聘した講義によって、現実社会の動向を、直接その当事者から聞くことが出来て、学生時代に取り組むべき自らの課題を、明確化するきっかけとなっている。

()「現代の産業と経営」連続講義

個別産業を深く理解することを中心的課題とした「産業論」の集中講義は、1年1回であり、学生は、2年間に2産業を学べるだけである。この制約を克服するため1991年には、『現代の産業と経営』というテーマで週1回、連続して13名の実務家をゲスト・スピーカーとして招聘する方式の講義を、開講した。「連続講義」は、製造業、商社、金融、証券、通信、林業、地方自治体などそれぞれの産業を取り巻くマクロ・ミクロ経営環境の世界的動向と共に各産業を横断的関連の中に位置づけて、現代日本の産業の全体像を把握することを、目的とした。(講義の日程、テーマ、及び講師は、表2に示す通りである。)

この集中講義の企画には、次のような目的を掲げた。

「これまで経済学部では「鉄鋼業」(戸田弘元氏)、「自動車産業」(川原田茂氏)、「国際経営」(大岩泰氏)、「公企業経営と地域開発」(大石和也氏)など、それぞれの産業部門の第一線で活躍されているトップ・マネジメント、管理職の方々を非常勤としてお招きして、集中講義の形式で「産業論」が開講されてきました。今年もすでに7月には三菱化成(株)の斎藤昌二調査部室長をお招きして「化学産業論」を講義していただきました。

今回の連続講義「現代の産業と経営」は、従来の講義と少々趣を異にしております。それはひとつの産業を深く理解することよりもそれぞれの産業を取り巻くマクロ・ミクロの経営環境の世界的動向の中に各産業の特質を理解するこ

表2 「現代の産業と経営」 テーマ、講師一覧

(所属及び役職は、1991年1月現在)

年月日	テーマ	講師
90.10.11	総論	松本 正氏(北海道工業大学学長)
90.10.18	激変する世界における我が国及び北海道経済	澤本 一穂氏(日本銀行札幌支店長)
90.10.25	北海道経済の現状と課題	黒川 淳二氏(北海道庁経済調査室長)
90.11.1	現代日本の鉄鋼業	矢田部 恵夫氏(新日本製鐵(株)室蘭製鐵所副所長)
90.11.15	電機メーカーにおける研究開発	中村 道治氏(㈱日立製作所日立研究所副所長)
90.11.15	日立製作所における国際事業	八丁地 隆氏(㈱日立総合計画研究所主任研究員)
90.11.22	現代日本の自動車産業	石綱 康弘氏(日産自動車(株)調査部長)
90.11.29	世界貿易と日本の商社	釜沢 克彦氏(三井物産(株)調査情報部室長)
90.12.6	国際化と日本の証券業	奥村 洋彦氏(㈱野村総合研究所取締役)
90.12.13	情報化社会とNTT	高橋 徹氏(NTT 取締役北海道支社長)
91.1.10	北海道林業の現状と課題	能勢 誠夫氏(北海道林業会館理事長)
91.1.17	地球環境時代の地域開発	滝口 国一郎氏(北海道富良野市市長)

と及び各産業を横断的関連を持って位置づけて、現代日本の産業の全体像を把握することに重点を置いています。

毎週木曜日の午後3時間を使い各分野の第一線で活躍されている方々においでいただき、講義を展開していただくことといたしました。これはおそらく北海道大学経済学部においては全く新しい試みであると思います。私は長い間この構想を温めてきましたが、今回講師としておいでいただいた方々の格別のご理解とご支援により実現することができました。ここに深く感謝したいと思います。

国立大学という制度上の制約もありまして北海道工業大学学長松本 正先生に総論と学生諸君に正規の講義として単位を出す責任を持っていただくようお願いいたしました。

松本先生は北海道大学工学部の教授をされた後に北海道工業大学の学長に就任されました。最近では工業大学に情報関係の新学科を創設することに敏腕を振るわれました。また北海道内の各種審議会、団体の委員長としてご活躍であります。

私は日本の社会学者の迫力不足は、先進国の理論の翻訳、紹介、文献研究に終始し、社会事象を単に認識し、分析、評価するだけであり、自分で具体的な問題解決システムの構想、開発

とその現場へのフィードバックを行っていないことにその原因の1つがあると考えています。

大学という閉ざされた場に身おきながら、深刻化する諸問題に対して思いつきの言葉を発しているにすぎず、専門家という隠れみので問題に対する人間としての責任倫理を欠落させていることが、根本的原因であると思います。学問研究には自由が必要ですが、責任を抜きにした自由はありません。大学の自治の美名のもとに責任を取らない自由を主張するやり方は、特権階級のごう然たる思い上がりには過ぎないのです。

問題解決に向けた真剣な知的挑戦こそ学問研究の命であります。現場の事実を踏まえない三流評論は、百害あって一利なしなのです。

学問研究の出発点であり、また帰っていくべきところは現場(フィールド)であります。産業の現場の第一線で奮闘されている実践者の立場から「産業を軸にした時現代の世界と日本において何が重要な問題であるか」が、鮮明な形で提起されることと思います。

この連続講義のもう一つの目標は、大学、産業界、官界の相互の新しい交流のスタイルを、この北海道大学経済学部を拠点として作り出すことにあります。

ベルリンの壁の崩壊以来わずか1年足らずの

間に東西ドイツが統一されたことに象徴されるように、現代は激動と大転換の時代であります。一国の知性を担うべき若い世代の知的人間的退廃は、その国と社会の将来を危うくすることは明らかであります。

多忙な日常業務をも顧みず来学頂いた講師の方々とは真摯に学ばんとする“学生”の交流が、“知的に緊張した場”をつくり出すことを期待しております。これでこの連続講義を構想、企画、設営したものからのご挨拶といたします。(1990.10.11)

また講義要録『現代の産業と経営』の編集・出版に際して「編集後記」に記した総括は、次の通りであった。

「本書は北海道大学経済学部において1990年10月から1991年1月に至るまで連続12回にわたり展開された「現代の産業と経営」をテーマとする講義の要録であります。

まず業務ご多忙中にもかかわらず、遠くは東京からわざわざ講義のために大学においでいただいた講師の方々に心からの感謝の意を表したいと思います。講義に際しては学生の理解を深めるために資料やスライド、ビデオなどAV教材を準備していただくことができました。さらには本書に収録した講義の要約原稿をお寄せいただきました。若い世代の教育に対して社会的部門を超えた熱意とご尽力に敬意を表したいと思います。

この連続講義は米山が中心になって企画・設営したものでありますが、国立大学という制度的、予算的な制約と障害をもつともせず座長的役割をお引き受け頂き、総論を展開して頂いた北海道工業大学学長松本 正先生をはじめとして、講師の方々の絶大なご理解とご支援により開講が可能となったものであります。また是永教授及び経済学部同窓会にもご支援をいただきました。

1976年のOECD調査団の批判によるまでもなく、明治以来の近代日本の大学における社会科学的研究には重大な欠陥が存在すると思われ

ます。理論研究と称して、先進諸国で流行する学説の文献の翻訳、紹介を行い、かろうじてその日本の適用に関心を持つに留まっていることです。日本の社会の現場で起こっている諸問題を無視あるいは軽視して、理論への信仰に陥るといった精神的未熟現象が、至るところに見られます。

西欧諸国の社会歴史的経験をもとに発想された概念とアジア大陸の東の端に位置する列島に形成され、遅れて資本主義化した日本社会の現実とのギャップを、近代化論や革命論で埋め合わせをしてよしとする知的怠慢であります。可能な限り現場に接近し揺るぎなき事実をもとに全体像を描き、そこに発見された問題を具体的に解決するための理念、構想、具体策を考え出すことが知的責任であるという認識は、極めて希薄であります。西欧諸国からの遅れやひずみに焦点が合わされ、議論が展開されていたのです。

“象牙の塔”という幻想と空虚な権威の中に自らをおいて、現実社会を軽視してきた「大学人」と称する人間の退廃こそ問われなければなりません。「学問の自由」の美名のもとに、社会の公的な器である大学の私物化が行われ、大学外との交流に対して極めて閉鎖的姿勢を持ち、何ら顧みるところがないのが一般的傾向であります。地球環境の深刻な危機に陥った20世紀末の人類社会が直面する諸問題の解決に対して新しい理念と方法と具体策においてどのような貢献ができるのか—これこそが学問の真価を問う試金石であります。

市民の個人的趣味としては大いに結構なことでありますが、職業として行われ国民の税金により支えられた学問研究が、問題解決という視点と社会的貢献という認識を持たない場合は、反社会的であり無意味ですらあります。

知的創造性が枯渇しその社会的機能が内部から麻痺する危険性ははらむ現代日本の大学を、人類の文化の継承と創造の場として復活させるには、社会的各部門間の異質の交流を盛んにし、

その知的作業の成果を、作品として社会に提出することが必須の条件であります。

そのためには社会の現実の諸問題を揺るぎなき事実のレベルにおいて把握し、その解決のために真摯に努力している人々の声を虚心坦懐に聞くことからスタートしなければなりません。もちろん国境と文化を超えた国際交流も不可欠であります。

今回の連続講義は、大学における異質の交流と知的作業を通して社会への貢献ということを目指した小さな試みであり、本書はそれを作品にしたものであります。これが一つの礎となり新しい交流が生み出され、大学と社会の知的創造性に対する有効な刺激となることを期待しております。

連続講義の開講と本書の出版にご協力いただきました方々に心からの感謝を申し上げて編集者の言葉といたします。ありがとうございます。(1991.10.28)³⁰⁾

この講義においても毎回講義終了時点でコメント(400~500字)を提出、最後にまとめのレポート提出を課題とした。

受講学生155名(3年116名、4年39名)による全講義終了後の講義に関する評価の一部は、次の通りである。これによれば開講の目的は、達成されたといえよう。

1990年度「現代の産業と経営」学生コメント

1)一つの業種に産業にとらわれずに経済社会をさまざまな面からとらえようとしている狙いがよかったし、実際に達成できた。また各界の第一線で活躍している人(しかも複数)の生の講義というのはありがたいし、今後役に立つと思う。産業界地方自治体の両方から講師をお招きしたことがよかったと思う。しかも地位、発言力の強い人ばかりで、どなたも明確なビジョンを持っていたので講義も味

のあるものだった。

今回のような講義は通常の講義を膨らませるという役割があると思うので、来年度からもどんどん実施してもらいたい。(隔年でも)通常の講義は本来現代の経済をとらえ問題点を指摘し、新たな提案をすべきものである。理論だけでは意味がない。理論 現実 理論

・ ・ という Feedback の連続によって発展すべきものだと思う。(4年OT)

2)「生の情報」が多く得られタイムリーな話題も多かったので、通常の講義とは違った面白さがありました。時間の制約上その産業の現状と課題の概要という内容でしたがその分さまざまな企業について知ることができ有意義な企画だったと思います。(4年JA)

3)経済学部に来て初めて「自分から学習したい。欠席したら損をする」と思わせる授業であった。テーマも多岐にわたっておりさまざまな知識を吸収することができてよかったと思うから今回の講師陣の質の高さに驚いた。特に井上氏、滝口氏の講義は素晴らしく、お二人とも経済人である前に哲学者であるという印象を受けた。(4年KT)

4)現役でバリバリ働いているトップの人たちから直接話を聞けることなどめったにあることではない。「生きた教材」といっては失礼かもしれないが、「今動いている経済」を感じ取り、学ぶことができた点ですばらしい講義であった。今回のこの連続講義は自分が今まで受講した経済学の講義の中で最も刺激的なものでした。「やる気を起こさせる」という表現がぴったりきます。第一に内容が「面白い」。これは大事なことです。講義がつまらないとやる気もなえてしまいます。第二に毎回自分の感じたことをその場で書いて提出するので、理解が深まります。なんとなく理解するのと、後で文章に書けるほど理解するのでは大きな差があります。(4年MK)

5)夏休みの集中講義以来外部の人の話が聞けて、それも多様な内容で容易に興味を持續す

30) 米山喜久治編(1991)『現代の産業と経営』p.176
北海道大学経済学部

- ることができたのでよかったと思う。理論と現実の接点のような内容だったと思う。(4年HA)
- 6) 現実の問題をリアルタイムに扱う講義がいままでほとんどなかったため、非常に新鮮な印象を受けた。また以前から企業の国際化について監視を持っていたため大いに知的好奇心を刺激された。たぶん交渉してくださった方は教えた経験がほとんどなかったと思うのだが、時間がたつうちにどんどん話に引き付けられた。実務経験に裏打ちされた説明の素晴らしさを感じた。(4年YM)
- 7) どの講師の方もとても重要なポストに就いている方々で、厳しい環境の中で仕事をなさっているせいか、話に緊張感があふれており、われわれ学生もとても強い刺激になりました。(4年SA)
- 8) この連続講義は異例なものだったのでしようが、ぜひ続けていってほしいと思います。理論的な部分が大事なのはわかりますが、どうしてもそれだけでは受講しようという意欲はそそられないところがあるので、こういった講義を織り交ぜて行ってくれば「単位を取るだけ」の受講態度も少しは改善されるのではないのでしょうか。(3年HM)
- 9) 現代の産業と経営という題目の今回の講義はまさに現代の社会経済を垣間見ることができたものだったし、それは期待以上のものでした。やはりトップ企業のトップは厳しい環境の中で生きるか死ぬかの活動をしているだけあって、その緊迫感は私たちにもひしひしと伝わってきました。(3年KM)
- 10) 経済学部の講義にはない新鮮さを多いに感じた企画で、大変ためになりました。テーマも多岐にわたり学生の関心のある分野を網羅していてよかったと思います。熱心にお話しをくださった方々ばかりでとても好感が持てました。また学生の質問にも丁寧にお答えを下さって理解しやすく思いました。(3年SS)
- 11) 経済学とは実践的理論を学ぶ学部だと思う。しかし学部の授業を見ると古典的理論の学習をするが、臨床という生の現代の情報には触れる機会がなかったと思う。その中でこの講義はそういう生の情報に触れる絶好の機会だったと思うし、これから身を投じる社会のことを知るいい機会だったと思う。(3年OT)
- 12) 12回の講義ともに私が事前に想像していた通りの感じの方々ばかりであった。つまり産業ごとにその産業に合うと思われる色を持つ方々ばかりであり、その点からも現代の産業と経営を見る上で役に立った。皆忙しく緊張の生活を送る中でよく来て下さったと感謝している。(3年WM)
- 13) この講義が始まる前から大変楽しみにしていた。いろいろな企業の長たる方からお話をうかがうなどと全くといっていいほど機会がなく、それを学校でうかがえるとは夢のようであった。実際講義が始まると毎日さまざまのことを勉強できた。特に現場の生の話を聞くことが、できたのはまことに幸せだった。教科書や文献の中にしかいなかった自分の世界がある面で広がった気もした。(3年YE)
- 14) 経営学にとっていま現実社会で動いているファクターを知ることは非常に重要なことだと思う。そういう意味で企業という社会体制に実際に従事している方々から直接話を聞くというのは非常に重要なことではないだろうか。(3年OT)
- 15) 企画の意図も明かであって凝固しかかっている大学内に外部からの新鮮な空気を取り入れたという点からも評価しなければならないし、できることならば今後とも継続されることを望みたい。(3年KN)
- 16) 大学の講義のみでは得ることができない、第一線で活躍する方々からの話を聞く機会となり、大変にありがたかった。また各テーマも大企業から地域産業、シンクタンクと多岐にわたっており多角的でよかった。各先生の立場が分散していたこともあり、すこぶる多

- くの軸から現在のわが国の経営について考察できた。(3年YT)
- 17) 全12回を通じてグローバル企業あり, 全国的企業あり, 地域的企業あり, 自治体, 研究所などさまざまな分野からさまざまなテーマが出てきたのは, いろいろな切り口から経済現象をとらえるのに有効だったと思います。それでも先生がその分野の専門家であるため, 私たちがケースでやるように学問の側からでなく, 自分の目で見生きた言葉, 事例をつかってくれたのはよかったと思います。(3年TK)
- 18) 各分野の第一線で活躍されている方々の話が聞けるというこの講義を楽しみにしていた。実際に講義に出席してその期待が裏切られることはなかった。(3年FA)
- 19) 我々学生が現在思っているのは, 今我々が学校で勉強している内容が社会に出てから本当に役に立つのかというものである。今回のこのような企画は現場のしかも最前線の人の声が聞けたということで大切な時間であったと思う。(3年HY)
- 20) さまざまな分野の現場の講師に時代の最先端の話題をさまざまな角度から論じる趣旨には最大の共感を持つ。グローバルな問題, つまり戦争と平和, 環境, 資源を現場でどう克服していくのかという議論をもっと聞きたかった。(3年HY)
- 21) このような企画は経営学を学ぼうとして社会に出る前の者としてとても有意義だった。テーマも多岐にわたり現代の産業を各方面から見られてよかった。(3年IS)
- 22) 普段あまり聴くことができない各産業界の話, それもそれぞれのトップから直に話が聞けたのはとてもすばらしい機会だった。特に3年目である自分にとっては来年の就職のこともありその参考としても今回の講義は十分に活用させていただこうと思っています。(3年NY)
- 23) 今まで北大に入っているんな講義を受けきたが, これほど充実した講義は数少ないと思う。毎回コメントを書かせてレポートを課すという講義の形態によるところもあったと思うが, それ以上に実際に経済界で活躍しておられる方々の生の声を聞くことができたことは, 幸運だった。毎回のよう思ったのだが, こういう機会があったのに自分の一般教養の低さのために情けない思いをしたし, 自分の知的レベルの低さを実感した。これを生かして大学生として恥ずかしくないくらいの勉強はしておきたいと思う。(3年IT)
- 24) 産業各分野のトップの人の話を聞けるといのはなかなかないので私にとってはありがたい企画だった。また全体を通して一つのテーマが核としてあったためか, 毎回違った分野の人たちが講義をしていたにもかかわらず, 最終的には1つの講義であったと感じられた。(3年YA)
- 25) こういう講義は今回が初めてらしいですが, これからも地方大学の学生が都会の生の声を聞けないというハンディを埋めるという意味でも, また学生から社会人への架け橋を渡すという意味でもぜひとも行うべきである。(3年KM)
- 26) 連続講義という企画は変化があつてよかったと思う。社会の“今”を感じる事ができたことが, 大きな収穫だった。就職という枠から外れた自由な視点で企業を見ることもできたと思う。(3年UN)
- 27) テーマは北海道経済 日本経済 グローバルな視点から世界経済 ネットワーク(世界の結びつき) 地球規模の資源環境問題にまで及ぶ。しかし自然環境は北海道の1市町村の働きかけが大切であるという, 大きな視野から身近なことの大切さまで学ぶことができた。両氏とも広範囲にわたっており1回の講義ごとに学ぶことが多かった。
- 業種が異なるから当然であるが, おのおの, 講師の方々の教え方や特徴は全く異なり, 毎回どのような形がくるのか楽しみであった。

- どの方もその業種を代表する形であるからなのか、人柄と仕事の内容には密接な結びつきがあることに気づくことができた。仕事に対する自信や誇り生きがいを感じた。(3年 KA)
- 28) 学校の中で議論一点張りの講義よりも生きたままのお話を聞ける企画は大変興味深く、面白かったしその分実際に勉強にもなった。(3年 IK)
- 29) 通常の講義とは違う、毎回要約を提出し、なおかつ講義のコメントを提出することにより学生の勉学姿勢が高まったのは確かであると思った。(3年 TN)
- 30) 学生の立場から言わせてもらえるならば、聞いていてワクワクするような講義であった。ある1面だけのモデルではなくて、本当の社会の核心に近づき、その息吹を感じることができた。(3年 MN)
- 31) 日ごろ大学内にいるだけでは話を聞けないようなさまざまな分野で活躍されている方々の「現場の声」に接する場を持てたということは非常に有益であると思う。(3年 KA)
- 32) ほとんどの学生が卒業後就職しているので実際に社会で働く人の話を聞けることは有意義であった。(3年 HA)
- 33) 大学生も3年目、4年目になるとかなり社会に出てからのことを考えていると思うので、その思考を助け強化するうえで非常に有益だったと思います。(3年 MM)
- 34) 北大の経済学は理論主義なのかもしれません。しかし北大の学生は理論だけで物事を考えて、実際のケースが理論とどうかみ合うのか考える力がありません。理論が現実離れしていると思込んでいるのです。(3年 KH)
- 35) 日々の業務の忙しい合間を縫って熱心に講義していただいてありがたいと思っています。製品の実物を持ってきてくださった方もいて、それは大変面白いものでした。(3年 TY)

()「現代の経済」(1年生)

学部教育における「産業論」集中講義と「現代の産業と経営」連続講義の企画・運営の成果を踏まえて、1996年第1学期新入生に対する経済学・経営学入門コースとして位置づけられる「現代の経済」と題する講義科目を開講した。「講義のねらい」としては「受験体制に組み込まれた遥かに遠い小学時代にスタートした「受験生的思考」(標準教科書 練習問題 模範解答)を克服し、21世紀に生きるための創造的問題解決能力の向上を計ること³¹⁾。

自らの経験(手)と問題意識(頭)に従い、知的探検(フィールド・ワーク、文献研究)により問題を発見し、仮説を発想し、その本質を解明すること。問題解決の複数の具体策を構想し、制約条件の下で実行可能解を探究し、倫理性を守りながら勇気をもって解決策を実施する思考様式と人間性を練磨すること。そのためには自らの「新しい生活目標を設定すること。」を掲げた。

入学直後の1年生にとっては、受験勉強中心の高校とは違い「大学では充実しておもしろい学問」が出来ることを経験させること。学習と研究の方法論が必要であること。ナマのものに直接触れて、自らの知的好奇心に従い五感プラス直観を使って言葉に表現すること。文字や図表にして記録する。そして手を使って思考を発展させ、自己を表現すること。そこには「単一の正解」は、存在しないことを感得せしめることが必要である。同時に高校生から大学生への脱皮・成長を促すことが中心的な課題である。

1990年以降経済学部ゼミナール参加希望者に配布していた2年生へのメッセージ「充実しておもしろい学問をやろう」を、少し書き換えて新入生へのメッセージとして、講義の基本的方針とした。それは次の通りである。

「新入生の皆さんへ 充実しておもしろい学問をやろう！」

31) 米山喜久治(2002)「一般教育」『経済学研究』(北海道大学)第51巻第4号

北海道大学経済学部へのご入学おめでとうございます。長い受験生活にやっと終止符を打って、今日の新入生ガイダンスに参加できた自らの幸運を思い、これまでの生活を支えてくれた両親や近い方々への感謝の気持ちを忘れないでいただきたいと思います。遠く小学校時代に受験体制に組み込まれて以来自分が興味を抱くことに取り組む余裕を与えず、“それは大学に入学してから考えればいい”と自らに言い聞かせて今日まで来たのではないのでしょうか。今まさに皆さんは大学のキャンパスに立ち、それを実現する時を迎えたのです。

だが皆さんは受験から解放された喜びと同時に言い知れぬ疲れを感じているのではないのでしょうか。あたかも深海から急に浮上したかのように精神面における「潜水病」にかかってしまっているのではないのでしょうか。

大学は一つの社会制度ですから、授業時間や単位の取り方、進級などはすべてルールに従って運営されています。北海道大学で学生としての生活をスムーズにするには、ルールを最低限守らなければなりません。でもその後はすべて自己の責任において行われます。すべての手続きを終えた後はゆっくりと自分を見つめ直していただきたいのです。表題に掲げた“充実して面白い学問”はただ単に講義に出席するだけでは得ることはできません。

“学問を面白くする”には、まずは自分がどんなことに関心があるのかを自覚する必要があります。これは誰かに教えてもらうことができないことなのです。それには幼いころからの自分の経験を振り返ることです。自分の心の叫び声に忠実に耳を傾けることです。他人の評価を気にすることなく、夢中になって取り組み面白かったことは何だったのかを思い出してみると良いのです。

心の底から沸き上がってくる想い(知的好奇心)を基盤にして自分が生きる新しい世界を広げようとするときに手がかりになるのが、人類の知的遺産としての学問なのです。

同じ富士山でも駿河湾から見る姿と甲府盆地から見る姿は違います。学問も同じように人間、社会、自然、宇宙のどの部分に中心的関心を持つのか、どういう位置から観るかによって多様な専門領域に分かれています。“億光年”を単位とする大宇宙銀河系にある水の惑星が地球です。その上に1度だけ与えられた人生とその舞台を詳しく知り、生きる意味を発見し、創造していこうとするとき、学問は本来の面白さを示してくれるものといえましょう。

1980年代には戦後の高度経済成長によって日本は経済大国と呼ばれるようになりました。ベルリンの壁の崩壊に続くソ連の崩壊による東西冷戦の終結は、日本を取り巻く国際環境を根本的に変化させてしまいました。70年代には公害問題が局地的に激発しましたが、90年代の環境の悪化は地球規模となり深刻の度を深めています。

21世紀を目前にして日本は今や大きな転換期にあります。明治政府の悲願であった先進国に追いつき追い越すことを目的として1世紀以上も作動してきた社会システムは、機能不全に陥っています。

21世紀に大学を卒業し社会人として活躍される皆さんが取り組まなければならない諸問題は、ますます相互に関連して複雑化し、さらには変化のスピードが速く、簡単に解決することが困難になりつつあります。人類の直面する諸問題の解決のための普遍的な理念、方法論、構想力、具体的解決策、倫理性、リーダーシップなどが問われています。

あと数年で21世紀となる現代は、大転換の時代です。大転換、青春そして学問が、激動の現代を生きる若い皆さんの生活の核心であります。

明治政府に求められてアメリカから札幌農学校に赴任したW.クラーク博士が、札幌を去るに際して学生たちに残したメッセージは、“Boys be ambitious!”クラーク博士が学長を務めたマサチューセッツ農科大学(元マサチュー

セツツ州立大学アマースト校)の卒業生である Dartmouth College Amos Tuck School of Business Administration 名誉教授 Robert. H. Guest 博士(1983年来学)の北海道大学生に贈る新しいメッセージは、“Boys work hard. Girls be ambitious!”です。

ドイツの詩人リルケは青春の苦悩の中から詩作によって自らの新しい幸福に至る道を切り開いていきました。(『マルテの手記』岩波文庫)。また第二次世界大戦中ナチスのアウシュビッツ強制収容所から奇跡的に生還し得た精神医学者であるフランクルは、自らの地獄のような体験を考え抜いて、あらゆる人が最後の瞬間まで生きる意味を持ち続けていることを訴えています。(『それでも人生にイエスという』春秋社)。さらに現代の大学における学問と学生たちを抱える諸問題はなにか。またその解決の可能性と方法論について詳しく検討しました。(『探究学序説』文眞堂)

関心のある人は、読んでみることをおすすめします。

講義のシラバスは、次の通りである。

・本講義のねらい

受験体制に組み込まれたはるかに遠い小学時代から《受験生的思考》(文部省検定標準教科書 練習問題 模範解答)という思考回路を克服し、21世紀に生きるための創造的問題解決能力の開発に資することにある。

この「受験生的思考」とは、必ず解ける問題の模範解答を、できるだけ効率的に記憶して、与えられた問題に対してできるだけ高速でそれを“記憶”から呼び戻すことにのみ習熟した思考様式である。第二次世界大戦後の東西冷戦の終結により、世界の政治、経済、軍事の枠組みが揺らいでおり、すでに経済大国といわれるまでに発展した日本の主体的な人類社会への貢献が求められている。産業開発、人口爆発、地域紛争などにより環境の汚染と破壊は、地球規模に達し、問題が複雑化し深刻化している。

若い諸君が未来に向けて一人の人間として自らの人生を未来に向けて切り開いていくためには直面する諸問題を自らの主体性によって解決しなければならない。また将来所属する組織(企業等)も激変する国際環境に創造的に提供するのでなければ、存続を許されなくなっている。大学は21世紀に活躍できる人材を育て、諸問題の解決のための基本理念、方法論、具体策を開発し提示しなければならない。育成されるべき人間像は「問題中心的専門家」と呼ぶ人間である。それは直面する問題の解決に向けて、人類の系統的知識のストックから必要とされる知識を取り出して、自ら作り出した新しいイメージによってそれらを組み立て、総合化できる能力を持った人間である。

社会への貢献を志す者は、自らの経験(手)と問題意識(頭)によって、知的探検(内部探検、フィールドワーク、文献を探索)を行い、問題を発見することからスタートしなければならない。そして仮説の発想、問題の本質の解明、複数の具体策の構想、制約条件下の実行可能解の探求を行い、責任倫理をもって解決策を実施する勇氣を持たなければならない。本講義はこうした思考様式を錬磨することに資することを目的とする。「充実したおもしろい学問をすること」がモットーである。

・講義内容

われわれの生活の場で起こっている具体的事例を手掛かりにして、現代産業社会のシステムが抱えている諸問題を“目の位置”(マクロ、ミクロ、現場、虫、魚、人間、鳥、人工衛星)、を移動させながら観察し、考察する。

・Key Word

原風景、原体験、志、フィールドワーク、データ、文献探索、問題発見、意思決定、問題解決、仮説、発想、推論、分析、総合、手で考える。環境、市場、企業、生産、流通、消費、廃棄、システム、管理、参加、技術、労働、生活。

大学に学ぶ者は、現代社会とその1構成員で

ある自らを対象化しなければならない。国民の貴重な税金により運営される国立大学に学ぶ者は、その社会的責任を自覚する必要がある。このため経済学部卒業生9名の協力を得て、新入生への“メッセージ：学生時代に何をなすべきか”を寄せてもらった。講義中に寄稿された文章を印刷した資料を、配布し説明をした。これを踏まえて4年間の学生生活にも、その基本的な計画が必要であり、その基本項目を示す表を提示して説明をした。(表3)さらにこの表を、自分でチェックして、記入するレポートを、課題として与えた。提出されたレポートは、点検の上、コメントを加えて各自に返却した。

次に表4に示すように学内外から5名のゲスト・スピーカーを招聘して、それぞれの実務の第一線から見える風景と日本社会の直面する課題、仕事と人生、学生時代の課題について語ってもらった。

講義は、「論理性」と「体系性」が、重視されるのであるが、それ以上に新入学生には、「現代性」、「現実性」、「イメージ」が、重要であると考えられる。特に1年生の第1学期には、彼らの知的好奇心に刺激を与えて、これから始まる4年間の学生生活の中心的テーマの発見に至る手がかりを、与えることが必要であろう。“国際化”という言葉は、流行語であるが、自らの生きる現場で必要とされる能力は、必ずしも明確ではない。その中でもコミュニケーション能力が中核を形成しており、コンピュータの進歩と連動しながら事実上のスタンダードになった英語の能力が必須となっている。

英語は、あくまでもコミュニケーション「ツール」の1つとして身に付けることの重要性が、外国人から語られたのであった。カナダから北海道大学に留学し、大学院博士課程を修了後助手として研究を続けるPeter Firkola氏が、自らの日本文化、日本語体験と比較しながらユーモアを交えて説明をした、これは「英語=受験」しかイメージ出来なかった学生たちに強い印象を与えるものであった。

表3 経済学部学生生活の基本計画

	1年次	2年次	3年次	4年次
講義				
必修科目				
選択科目				
ゼミナール				
卒業研究				
知的生産の技術 (探究学)				
パソコン				
外国語				
スポーツ				
自動車運転免許				
Cooking				
Hobby				
Volunteer				
アルバイト				
就職活動				
留学				
その他				

表4 1996年度「現代の経済」 ゲスト・スピーカーとテーマ

1996年月日	テーマ	ゲスト・スピーカー
5. 28	北海道経済の現状と課題	北海道庁 金子 佳弘氏
6. 4	企業における人材育成	北海道生産性本部 古里 英一氏
6. 18	日本経済における構造変化と企業活動への影響	北海道拓殖銀行 志田 篤俊氏
6. 24	ツールとしての英語	北海道大学経済学部 Peter Firkola氏
7. 2	沖縄からのメッセージ	沖縄県庁 田里 正男氏

受講学生数167(男:131,女:36)のゲスト・スピーカー招聘の方式に関する評価は、約99%が、「よい」と評価し、「よくない」としたのは2名であった。「よくない」とした理由のコメントは、ゲストが「後半に集中して登場した」ことに対する批判となっている。

講義の前半部分では、学習と研究の方法論の説明を中心に展開された。高校時代のように教科書の解説を受けて、その記憶、理解度で能力評価を行う方式は、大学教育では、不適切であること。自らが直接観察、観測、経験した事柄からデータを作成して、思考を進める必要がある。社会的通念では「文系」学部である経済学部では、書籍や論文、資料に記載されている理論や事項を理解すればよいとされるのは、著しい誤解である。文献を手がかりにして推論

によって、論理を発展させる「書齋科学」の方法だけでは、決定的に不十分である。現実の世界、経済社会は、大転換期にあって、その正確な動向を把握しなければ、政府は、一国を維持発展させるための政策立案とその施行が、不可能である。また正確な市場調査がなければ企業も維持成長することは不可能である。激変する現状を把握するには、「現場の科学」、探究の方法（知的生産）が必要であることを説明した。

また「現場に学ぶ」ために学外の専門家をゲストとして招聘して、直接講演を聴く場面を設定しても、受講者が、それを主体的に受け止めなければ無意味である。

話された内容の要点をノートに取り、レポートにまとめるための適切な方法論の修得がなければ単なる催事に過ぎない。それは聞きっぱなしになり、中学、高校レベルに留まってしまう。社会科学的研究は、現場の事実、当事者の語ることに耳を傾けることから、スタートしなければならない。

このセッション全体の受講学生 135 名（男子 102、女子 33）による評価は、98.5%の学生が、「よかった」と回答している。

「ゲスト・スピーカーに学ぶもの」と題して記入されたコメント（回答 135）の Keyword の分布（1人、2項目の場合あり）は、図 2 に示すとおりである。現代社会とその問題の認識、

自己の能力、学生生活、思考力、さらにはコミュニケーションに関する関心を、持つことが出来たと判断される。新入生 135 名のコメントの内容は、以下の通りである。これによっても第一線で活躍する実務家を学外からゲスト・スピーカーとして招聘する方式が啓発教育には有効であることが、確認された。

1996 年度「現代の経済」ゲストスピーカーに学ぶもの コメント

回答に記入した学生は、135 名（女子 33 名、男子 102 名）である。

1) から 33) までは女子学生、34) から 135) までは男子学生の回答内容である。

- 1) 個人の資質こそが問われている時代だからこそ、私たちは柔軟性をもって真剣勝負の日常生活を送るべきだ。(MM)
- 2) 現代社会において、自己の日常生活における姿勢を考え直す。広い視野を持つことの重要性。(ST)
- 3) 私たちがこれから日本の経済社会に出ていくために必要な個性、ものの見方などを学ぶことができた。(IM)
- 4) 学生生活を終えて社会に出るとき、自信を持って自ら行動できるように自分を磨きたい。(SM)
- 5) 現代の日本は、大転換期だ。それを乗り越

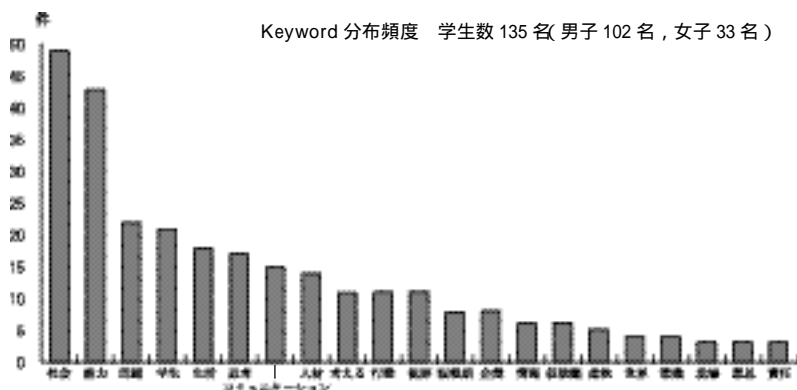


図 2 1996 年度「現代の経済」ゲスト・スピーカーに学ぶもの

- えて行ける人が、社会では必要とされる。私たち学生は、社会に出るまでにそういう人になるよう、自己開発をする時期にいる。(YM)
- 6) 多面的にもものをとらえられ、視野の広い人間になることが大学4年間の目標となった。(IK)
- 7) 自分を4年後成長していると認識できるためにも問題意識を持ち、問題を見つけ、その解決の道を見つけていく習慣を身につけていきたいと感じた。(IA)
- 8) 大学4年間で身につけなければならないことは大変たくさんある。外へ目を向け自ら考え解決していく能力を身につけるためさまざまなことに興味を持ち経験することが大切である。(MA)
- 9) 自己責任下で行動することができ、社会的価値判断ができ、そしてきちんと他人と意思疎通のできる人が、どこでも通用する人である。(NK)
- 10) どのスピーカーからも共通して得られたことは、コミュニケーションスキルの大切さと、オリジナリティーの重要性だった。我々はもっと柔軟な思考能力を養うべきである。(YM)
- 11) これからの大学生活を何気なく“ぼーっ”と過ごしては、社会に出て必要とされない人間になってしまう。私のこれからの課題はコミュニケーション能力を身につけることだ。積極的にいかねばならない。(OS)
- 12) 解決すべき課題を正しくとらえ、その問題を多角的に分析する能力と情報収集力に欠かせないコミュニケーションスキルを身につけることが求められている。(TR)
- 13) 現代の社会をさまざまな視点から考えてみて、一つ共通して言えるのは、誰かの言いなりではなく、自分で考え、自分から働きかけるという積極的な姿勢である。(ES)
- 14) 過去と現在を認識することによって未来の社会のあり方が予想できる。未来の社会に必要なのは、自己責任を負うことをできる個人、対人能力のある人間である。(KS)
- 15) 物事をいろいろな方向からとらえ、解決していくことの大切さについて。学生時代の過ごし方、時間の使い方について学んだ。(MI)
- 16) 4年間の大学生活の中で、社会的価値観を養うことが大切であり、そのためには失敗を恐れずあらゆることにチャレンジする精神を持たなければならないと思う。(SR)
- 17) 現在の社会の中で私がしていかななくてはならないことは、自分を見つめ直し高めていくことである。(WT)
- 18) 経済でも政治でもその活動は人間によるものであるということ。それを行う人間によってよくも悪くもなるということ。自分自身を作る(磨く)のは自分であるということ。(ST)
- 19) 大学時代に自分で物事を考える力を養い、知識ではなく知恵を身につけて21世紀に求められる人材となること。(KE)
- 20) どの人の話にも現状をしっかりと踏まえたうえでの、将来への課題、心構えが含まれていた。先まで見通して行動することが必要とされている。(NA)
- 21) 短い学生生活を有効に利用し、広い視野と確かな知識、そして豊かな創造力を得るよう努力することは非常に重要である。(MA)
- 22) 今までの習慣的な考え方にとらわれない柔軟性、物事を多面的にとらえる視野の広さが今後大いに要求される。(HH)
- 23) 今さまざまな課題を考えるときに求められるのは、マニュアル通りの考え方ではなく、新しい発想や個性であり、それを他に伝える力である。(SN)
- 24) これからの大学生活、“ぼーっ”としていては中身のない、自己主張できない人間になってしまう。(FM)
- 25) 固定観念にとらわれることなく、広い視野で物事を見つめ考え発展させていくことが重要。(KS)
- 26) 受験生的思考を脱却し、これから自分自身

- を考える一つの糧となるもの。(WM)
- 27) 普段はあまり聞くとのできない現場の話が多く、大変なためになった。(MM)
- 28) 社会に出るための創造力、アイデアを育て専門性を持ち、対人能力、価値観や答えを作り出すためのアプローチを持つ自立型人材になる必要があり、その道具として英語のコミュニケーション能力がある。沖縄と全国には依然として軍事問題などの格差が存在する。(TM)
- 29) 自分は企業が要求する人材になりうるのか。(IY)
- 30) これから共通してわれわれに必要なものは、やはり「当事者能力」、「価値観の転換」だと思われる。(AS)
- 31) 何をしてもまず行動を起こしてみることが、必要かつ重要なこと。(SN)
- 32) これからの世界で活動していくには、常に自分自身を磨き、他の人と異なるアピール・ポイントを持つことが必要である。(MN)
- 33) 大学を卒業して社会人になるために必要な心構えを、この4年間で身につけることが大切である。(MA)
- 34) 自分で考えることの重要性、コミュニケーション能力の大切さ、受験英語とコミュニケーションとしての英語の違いなどを学んだ。今後の生活に生かしていきたいと思います。(IT生)
- 35) スピーチを通して自らの能力不足と欠けている能力の早期獲得の重要性を知った。欠点の発見からその克服へと早く動いていかなければならない。(HK)
- 36) さまざまな価値観の大転換期である現代において、大学生である私たちが今考えるべきこと、すべきことを現場の生の声をもとに考えていく。(TM)
- 37) 大きな転換期を迎える現代の日本経済で役に立つ人材になっていくには、今までの暗記中心受験生的思考からの脱却を図り、この大学生活で多くの視点を持ち、自らの可能性を広げ、積極的に行動すること。(YK)
- 38) 日本経済はいま大変な転換期にある。そしてその変化に伴って人材の雇用、企業側の必要としている要素も変わってきている。(TD)
- 39) 学生という居心地のいい状況に安住することなく、自分を高いレベルに持っていくために、さまざまな能力を開発して、社会の中で自分を確立できるようにしておきたい。(MA)
- 40) 革新の時代とは何か、それに我々はどう対処すべきか。どれだけ我々は現状について理解しているのだろうか。(WS)
- 41) これからの社会に出ていくうえで、我々がどのようにものを見て、どのように考え、そしてどのように行動すべきかということ。(ST)
- 42) 社会に出る前もしくは出てから、自分自身をもっと能力をつけていかななくてはいけない。(HM)
- 43) 現代社会の現状というものを把握し、これからの学生生活をどのように過ごしていくかを考え、しっかりとした意見を持った社会的な人間になる。(NY)
- 44) 日本の経済、社会は戦後50年を経て大きな転換期を迎えている。その社会へ出て行くためには、従来の知識を身につけるという考えではダメで、自己のイメージ力や問題へのアプローチ力、そして人とのコミュニケーション力を身につけなければならない。(NY)
- 45) これからの社会では受験生思考ではなく、個性、多様な価値観、自分の意見を持つことが必要とされ、それを大学生活で養うべきである。(KA)
- 46) 社会に出る私にとって必要な能力とその習得方法についてわかった。(TH)
- 47) 現状を考えるには現場で働いている人の話を聞くことが大切であると同時に、自分でその場に行ってみることが大切である。(UH)
- 48) さまざまな人の意見を客観的なものとして

- 取り入れ、自分の中の主観性と比較し思考することの大切さ。(TU)
- 49) (問題意識 - 問題分析 - 実行) という流れの確立とそれに必要な能力, 知識の必要性ということを学んだ。(IS)
- 50) 日本の社会全体 (経済も含めて) が大きな転換期にさしかかっている現在において, その中にこれから住む私たちが目指すべき態度を社会の実情 (人間, 企業, 国際, 平和) を参考に考えていく。(FS)
- 51) 日本の産業構造が変化する中で, 受験生的考え方から抜け出し実社会での問題に対処していけるだけの考え方や技術を身につけていく必要がある。(AK)
- 52) これからの時代をどのように生きるか。(YN)
- 53) 自分がこれからやるべきことを多く学んだ。(HM)
- 54) 変動の時期においてわれわれは自己の個性, 能力を認識し, それを確立しなければならない。(YA)
- 55) 受験生的思考を多方面での社会の経験を聞くことで脱却していくための準備。(HT)
- 56) さまざまな角度から物事を見なければならぬということが分かった。(AK)
- 57) 多角的にもものを見ることによって, 自分のしたいことを見つける。これからはそれによって仕事ができなくてはならない。(MS)
- 58) 現代の日本で現役として働いているゲスト・スピーカーの方々は, それぞれの方面のプロであり, その話は非常に感銘を受けた部分が多い。これからは自分の思考軸がより豊かとなるものである。(IY)
- 59) 広い視野を持って広い人間関係の下で問題に直面した際自分の知識を生かし, 他の人も協力して解決することができることである。(OY)
- 60) 自分の回りを見るだけでなく, 得られる情報から社会の現状を把握し, 全体の中で自分らしさを見極めて, コミュニケーション能力を発揮し, 自分らしさを表現すること。(FM)
- 61) 現代の社会情勢に対応するために自分で考え行動する力が必要である。(TA)
- 62) 今までの受験生的思考を脱却し, 広い社会に目を向けることが大切である。(AT)
- 63) 企業は今自立型人材を求めている。専門的能力を持つことも大事だが, その前に自分の視野を広げ客観性を持たせることも重要である。学生時代はその準備期間といえよう。(MH)
- 64) 暗記中心の詰め込み式の受験生的思考から, 多面的な視野からの思考法への転換の必要性は, あらゆる方面の産業や社会生活で当てはまることである。(IT)
- 65) 個人の能力の大切さ, コミュニケーションの重要性。(UK)
- 66) 自分はこの4年間で何をしなければいけないか。(AJ)
- 67) 日本のあらゆる分野における変化とこれからの日本の生きる道, そして自分たちの役割の重要性。(TK)
- 68) 現代社会特に現代企業が必要としている人材は, 「やらせればできる」ではなく「やっついてできる」人間であり, 自己開発向上に積極的, 精力的に力を注ぐ人材である。(HG)
- 69) 現在の情勢を的確に把握し, そのうえで現代社会はどうなって, どうしていくべきかを検討する。(KE)
- 70) 21世紀, 社会に出る僕たちが今の大学時代に何をすることが重要である。(YY)
- 71) 自分の頭でその話題を考え要点を素早くメモすることが大切である。(WK)
- 72) 広い視野を持ち社会をさまざまな側面から認識して, 情報収集することで, 自分の能力を開発していくことが, これから現代世界に求められていることである。(KK)
- 73) 自分の考えを表現ということは, 自分というものを知ることにつながり, それで大学生活を有意義に過ごせる。(SS)

- 74) 専門能力, 対人能力, 価値の提案力(創造力?), 語学力のある主体の人間こそ求められる人材である。それに対応するには多様な関心を持ち, 全体イメージをつかむ目が必要である。(UH)
- 75) 受験生的思考からの脱却をはかろうとするとき, いろいろなことに興味を持つ, 積極的である, 行動に移すことが必要である。(IS)
- 76) 今は構造転換の初めであり, 自立型の人間が求められているため, 自分は能力を磨くように努力したい。(TK)
- 77) 今われわれに必要なとされるのは, 自分の力で考えるということ。ノートをいくつもの面からとらえられるということ, そして他人とのコミュニケーション能力である。学歴社会なるものはすでに時代遅れである。(NT)
- 78) 現在の変化の時代の中で, 自分の能力を磨くのは必要不可欠である。そのためには知識をつける学習よりも考えるという行為自体を大切にしなければならない。(MK)
- 79) 日本社会におけるさまざまな変化と問題。今日本人に求められているさまざまなものに対応策。(KG)
- 80) 使える人材になれる素質を磨き, ものごとを受け付けて広くさばける力をつける。すべては自分の向上心から始まる。(FK)
- 81) 今でもバブル期の不況の影響がまだ残っている。この経済状況を打開し新しい経済を築き上げていくためには新しい能力が必要である。(IK)
- 82) さらに複雑化, 深刻化していく日本社会や世界環境の諸問題に対し, 自らの手によって解決できるような人間性を身につける必要がある。(HA)
- 83) 現在世界経済は大変動の時代を迎え, 個人個人の能力や創造力が求められている。また企業も社員の能力開発に取り組んでいる。(NH)
- 84) 日本のあらゆる分野における変化とこれからの日本のあるべき道, 自分たちの役割の重要性。(TT)
- 85) 20世紀の産業と21世紀への過渡期の現在。また21世紀型産業について。(EH)
- 86) 多くの異なる視点による話から学ぶところは, 大きい。われわれはコミュニケーション能力を磨き, その場に立ち会い, 社会に出ていくにふさわしい能力を身につける必要がある。(TT)
- 87) こうやってみたいという積極的な意思を持ってものを取り取り組むことが大切である。またコミュニケーション能力を生かして情報の収集力を高めることも重要である。(KK)
- 88) 人生は短く時間は限りのあるものであるから, 自分をどこでどのように生かすかが問題になり, その解答は遠いところから与えられるのではなく, 自分の中から探さねばならない。(YK)
- 89) 世の中にはさまざまな問題がある。それぞれ立場から分析し, その解決策と今後求められる能力の探求。4年間の過ごし方は非常に重要である。(AT)
- 90) 大学時代の過ごし方。我々が大学生の内に何か能力や自分なりのものの考え方を見つけた方がよい。(YT)
- 91) 多くの分野の人たちの話を聞いてこれからの社会に必要な新しい見識を作り出す。(KK)
- 92) さまざまな分野で働いている人々の経験に基づいた話は, 自分のこれからつまり将来について何をなすべきかという点に関して考えさせられました。(BS)
- 93) 今後求められる人材とは, 主体的であること, 国際化に対応していることを兼ね備えた人物である。(AH)
- 94) 日本という枠にとらわれずに, 人類に課された多くの課題と向き合うために大学在学中にすべきこと。(AT)
- 95) 学生に自分の能力を開発していないと企業からは誘いが無い。コミュニケーションは最も重要な能力である。また時事問題には目を向

- け自分の考えを持つこと。(TH)
- 96) 大学生活でチャレンジ精神を持って多方面に関心を持ち、創造力を磨きなさい。(KS)
- 97) これからの企業が求める人材になるための自身の努力、方法を学んだ。(SU)
- 98) さまざまな人々の話によってさまざまな視点が増えて、これから大学でなすべきことについて真剣に考えられるようになった。(HS)
- 99) 物事を正確にとらえそしてそれを他の人々に正しく伝えるためには、いろいろな角度から物事を眺める必要がある。この4年間でその力をつける時期である。(OS)
- 100) 社会の動向を自分なりに考え、理解を深めそれに対応できるだけの能力を身につけなければいけないと思う。(YT)
- 101) 自分はスピーチより社会に出るためになすべきことを見つけた。(WT)
- 102) 日本は今重大な転換期にさしかかって、人材育成が重要な課題となっている。また沖縄の価値を見直さなければならない。そして私たちも問題解決へのアプローチを学ばなければならない。(MJ)
- 103) いま日本に起こっているさまざまな問題、これを解決するためにはわれわれ若者たちが、己を知り、今できることを行い、考える能力の開発を行っていくことが必要である。(NK)
- 104) さまざまな問題に対してありのままに見ようというスタンス(現実直視)それを理解する力、客観性が知識の習得よりも優先されるべきだ。(US)
- 105) 自分なりの価値の発見とそのために求められること。(SK)
- 106) 社会から必要とされる人間になるには、大学時代において柔軟な思考、創造する能力を培わなければならない。(IN)
- 107) これからの日本社会に求められている人材または求められるようにするにはどうすればよいか。(KT)
- 108) 国際的なコミュニケーションが現在において最も求められているうちの一つである。(TY)
- 109) 多方面の知識を得てグローバルな視点で物事を見つめられる力が大切であり、その力を学生時代に身につけたい。また情報を選択する力も身につけたい。(NT)
- 110) これからの社会の中で自分たちがやっていくために、大学の生活がいかに重要な位置を占めているのかを、今私たち自身が認識して生活していくべきだ。(MT)
- 111) 大学での4年間に何を学ぶべきか。(YT)
- 112) これからの時代のためには能力に依存した人材育成、意思伝達力の育成が必要である。(SS)
- 113) すべてのスキルの底には話す力、聞く力があり、その力をうまく使いこなせなければ他の力も十分に使えない。(KI)
- 114) 自分の中で足りなかったものがある程度理解され、人にはさまざまな視点から見たいくつもの見方があり、自分自身それを知識として吸収する必要がある。(AR)
- 115) 人の話を聞くことによって何かを学ぶ方法をよく考えるよい機会になった。(NK)
- 116) いま日本の社会や経済は大変革期にある。その中で持ち上がる問題、そして個人に求められるものは何だろうか。(YT)
- 117) 柔軟な思考の中に芯が通っている自分自身を磨き、鍛える。(NY)
- 118) 20世紀に向け社会に出ていくために必要なものを学ぶことができた。目的意識を持ち全体の中の個人として積極的な行動をするべきだと思う。(IT)
- 119) 現状を把握し、理解してそれをもとに行動を、表現することが大切である。(SU)
- 120) 他人とのコミュニケーションの大切さ自分で決定したことは自己責任が伴うことなど多くのことを学べた。(KK)
- 121) 私たちの思考力の欠落が多く弊害をもたらす可能性がある。一方受験生的思考から抜け出せば私たちの可能性は大いに広がる。(AK)
- 122) 社会の変動に対応しその時4年間学生時

- 代をどう過ごすか。まず自分から積極的に活動し、価値観、ものの見方を確立していく。創造力を磨く。物ごとに多様な感動を受けた。またヒラメいたりしたらメモを取る。能力、実力の社会に備えておく。(HM)
- 123) 受験英語から脱却できない自分。(TS)
- 124) 今はグローバル化、国際化の時代に入り、経済的または政治的視野から考えても、まさに転換期の時期である。このことは大学生生活の過ごし方を考えていくべきである。(NS)
- 125) 思考軸の確立、自己能力開発への努力の必要性。(MK)
- 126) さまざまな人々の考えもの見方に接することで受験生的思考からの脱却のきっかけとし、自分を向上させる要素として大切に受け止める。(OH)
- 127) 現代は難しい問題が山積されており、それを解決するためにはさまざまな側面から積極的に取り組む。(TM)
- 128) ゲストスピーカーの講義で自分の視野が広がった。(OT)
- 129) 北海道経済の現状とそこにある会社の欲しが人材に必要な能力。(FT)
- 130) 数多くの問題へ自分からぶつかっていき考え解決を求めること。(YN)
- 131) 経済の構造変化期である現在において、個人に求められるもの。どのように自分を向上させそれぞれの状況に対応できる人間になれるか。そのためにも大学の4年間を有意義に過ごしたい。(OK)
- 132) 学歴だけで人が評価される時代は終わりつつあり、能力主義の世の中になる。(UT)
- 133) ゲスト・スピーカーの話を聞くことで私自分の中での考え方、意識改革ができた。物事に対する学生生活をただらと過ごすのではなく、毎日より多くの情報に接する。(MT)
- 134) 現在の日本経済にはいろいろな問題点がある。日米安保問題、リストラ等々である。今後の日本を考えるには多面的にとらえなければならぬ。(IY)
- 135) 現在さまざまな面において変換の時期にきている。この時期に生き残っていくために、能動的、創造的に行動すべきである。(HA)
- () 「企業論」
- 「産業論」(集中講義)と「連続講義」の企画・運営と1年生入門コースである「現代の経済」講義担当の経験を踏まえて学部教育への本格的な「ゲスト・スピーカー・システム」の導入を行った。2003年度テーマ及びゲストの一覧は、第5表に示すとおりである。受講学生は、227名であった。進め方は図3に示す通りである。
- 2003年度 企業論
- 2003年度「企業論」のシラバスは、次の通りである。
- (i) 授業の目的
- 20世紀の高度産業社会は、地球環境の絶対的制約条件に直面し、臨海点に達している。20世紀に確立された大量生産、大量流通、大量消費、大量廃棄によって成立した「豊かな社会」は、その存在を根底から問われているのである。
- 高度産業社会の構成単位である“企業”には、消費者、従業員、投資家、ビジネス・パートナー、地域住民、NPOメンバー、その他政治、文化活動等多様な立場からの関与が可能である。大学に学ぶ学生としては、消費者、アルバイトによる従業員、将来の雇用関係により従業員等の立場からの関与が可能である。最も重要なのは学習と研究を目的としての関与である。抽象化された文字や数値を通して、企業を認識するのではなく、自己の身体感覚をもとに生きた現代企業の全体像を把握することが必要である。将来の職業生活を切り開くためには「能力開発自己責任」の原則を自覚し、職業観の確立が求められている。
- 本講義は「論」を離れて、自らが生きていく中でどのように企業に関与するかを、“手で考

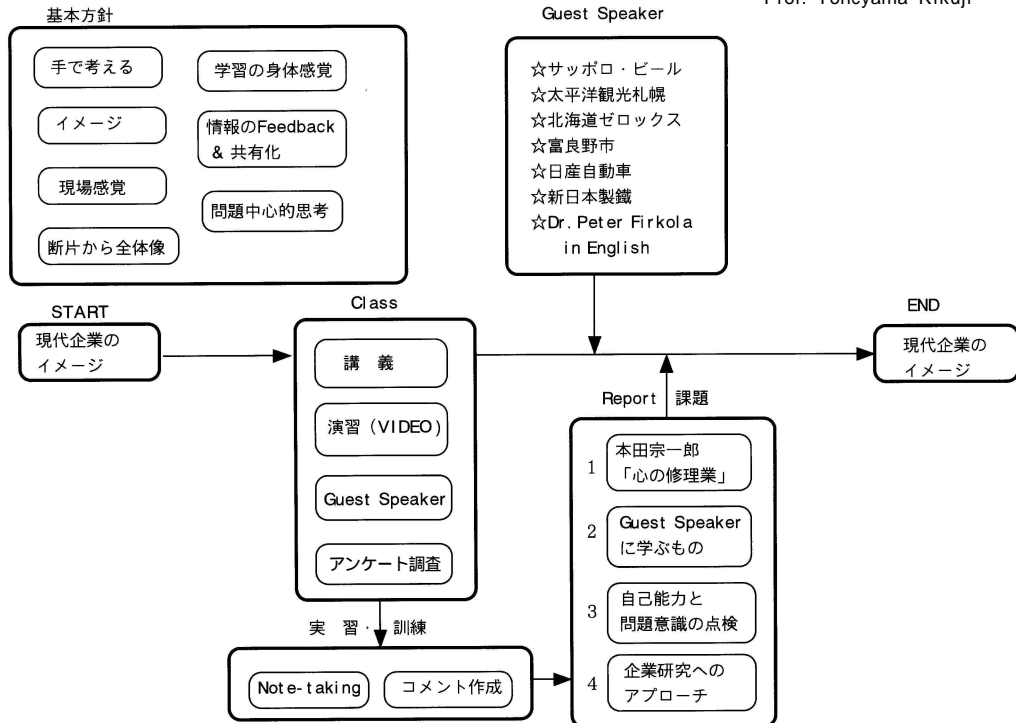
2003 Oct. 11th
Prof. Yoneyama Kikuji

図3 北海道大学 経済学部 2003年度「企業論」

え”ながら、キャリアの策定を行う。

(ii) 到達目標

- 1) 聞く能力の開発
- 2) 現場感覚の回復
- 3) Note-taking Skill の習得
- 4) 「知的生産の技術」基礎の習得
- 5) 現代企業システムの理解

() 授業計画

- 1) インタロダクション
- 2) 現代日本の大学生と企業が求める能力
- 3) VIDEOの活用
- 4) ゲスト・スピーカー
- 5) Fieldwork と文献研究
- 6) データの組み立て、仮説の発想
- 7) まとめ

(iv) 評価方法

毎回講義終了後にコメントを提出。レポート提出(4回)。80%以上の出席が、絶対必要条件。

2003年度「企業論Ⅰ」(学部講義科目)では、民間企業、地方自治体等からの7名のゲスト・スピーカーを招聘した。激変する経営環境と先端的な経営実践を中心に講演して頂いたゲスト及びテーマは、表5に示す通りである。講義の運営原則は、「異質の交流」、情報の「フィードバック」、「共有化」、「累積化」を行うことにある。今年度は、これを徹底して行うことにした。講師と学生が、たとえ1対200であっても、真摯に耳を傾けて、内容の要点と自分の考え付いたことを、その場でノートテキングすることは、授業に主体的に参加することである。五感と直観を働かせて手をフルに活用して考えること

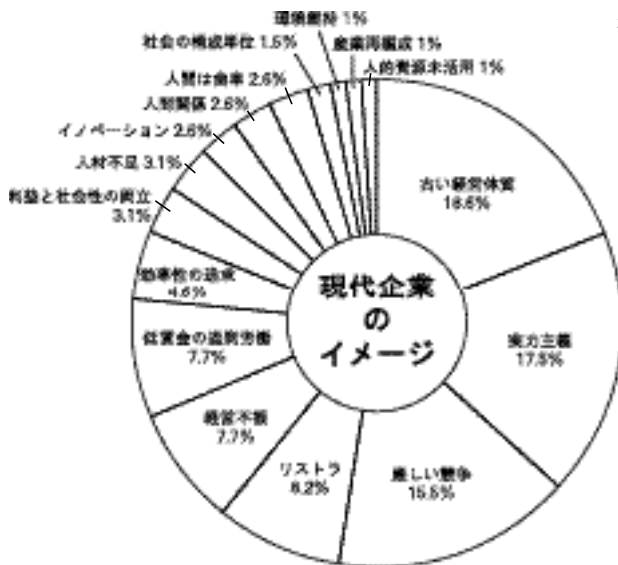
は、今ここにいて講師の話を聞いている自分を、感じることである。記録をとり、それをまとめて自分の意見を文章で表現することによって現場で考える、「学習の身体感覚の回復」が、可能となる。受動的な標準的知識の暗記とは次元を違えて、自分の考えを表現するためのOJTを意味している。多人数の中での質疑応答には勇気を必要とするが、質問は大いに歓迎された。毎回講義終了後50字程度のコメント(要約)を、提出。さらに2日以内に「考察」レポート(400~500字)の提出を課題とした。コメントは、集計・印刷してフィードバックし、学生間の共有化を行った。ゲストにもフィードバックして、ご返事が頂けた方のコメントは、学生に伝えられた。学期末には、自らが提出した全てのコメントの内容を、構造図解に展開した。この講義全体から自分は、何を学んだのかを、明確にし、リアルで自分も近い将来そこに主体的にコミットする企業像の形成を目指したのである。

まず講義のスタート時点での「現代企業のイメージ」を、自由に回答してもらった。キーワードでグループに編成したものの分布は、図

表5 2003年度 企業論 ゲスト・スピーカー・セッション

2003年	テーマ	ゲスト・スピーカー
10.17	北海道の観光産業	太平洋観光(株) 河本 睦哉氏
10.24	食品産業の現状と課題	サッポロビール(株) 今堀 忠国氏
10.31	日産自動車における経営革新	日産自動車(株) 児玉 幸信氏
11.7	北海道の情報産業	北海道ゼロックス(株) 伊藤 健司氏
11.14	ごみ処理の実践と展望	富良野市役所 佐藤 俊雄氏
11.21	コミュニケーションと英語	北大留学生センター Peter Firkola 氏
12.5	日本鉄鋼業の経営戦略	新日本製鐵(株) 宮本 勝弘氏

4に示すとおりである。「古い経営体質」(18.6%)であり、「厳しい競争」(15.5%)に立たされて「経営不振」(7.7%)、このため「リストラ」(8.2%)を実施している。従業員は、「低賃金と過剰労働」(7.7%)に悩まされている。他方「実力主義」(17.5%)を採用して「効率性を追求」(4.6%)し、「イノベーション」(2.6%)を推進している。それは「利益と社会性の両立」(3.1%)を、目指すものである。こうしたマスコミ等で形成されたイメージが、受講後どのように変化したのかを、学生のコメントによって確認することが出来る。最初の既成概念に縛られて、漠然としたイメージは、より現実に近く、具体的になったといえよう。現場の事実、具体的な経験から思考をスタートさせるためには、極めて重要なステップが、踏まれ



2003.10.3

N=194

図4 現代企業のイメージ (2003.1)

たことを、意味している。学生は、この講義を通して多くの新しい気づきを得ており、啓発教育の目的の一端が、達成されていることを、確認することが出来る。

2003年度 企業論 学生コメント

() イメージ

- 1) 先生やゲスト・スピーカーの方の講義を聴くことで、私が抱いた企業の印象は、「大きく成長する企業は自己の能力を熟知しており、その能力を生かせるように流動する時代への対応力を持っている」というものだった。そしてそのような企業は例外なく根幹に強いモチベーション、目的意識、情熱を持っていた。(HT)
- 2) 今までのコメントをまとめてみたが、これだけ見ても企業というものに対してさまざまな角度から見てきたのだと改めて感じた。半年という短い講義期間だったが、最初に書いた企業のイメージと最後に書いた企業のイメージが変わっていることが、この講義に出た意義があることを物語っている。最初は本当に企業というものに対して漠然としかイメージがなかった。それまで話に出てきたり、新聞やテレビのニュースなどで聞いていたり、なじみ深いものだと思っていたが、実際は企業について何も知らないといってもよいほどであった。それがこの半年間、企業で働く人々の講演を聞いたり、ビデオや資料を使った先生の講義を聞いたりして、具体的にとらえることができるようになった。(MU)
- 3) 私はこの講義の当初、企業に対する確かなイメージを持っていなかった。それは漠然としたあやふやなもので、現実の大手企業の姿を反映したものではなく、私個人の思い込みに過ぎなかったように思う。私は今回の講義を通して、実際に企業で働く人に接し、その話を聞くことで、企業に対してより具体的なイメージを持つことができた。企業の実態がつかめ、企業に対するイメージは変わってきた。(MH)
- 4) この講義を受けて自分の中での「企業」という言葉に対するイメージがかなり変わった。「企業」と聞くと、会社で働くサラリーマンや新聞紙面でよく見る文字「倒産」、「リストラ」といったことしか頭になかった。この講義のおかげで「企業」のイメージに具体性のある程度持たせることができた。(FH)
- 5) 講義では最初と最後の授業で現代企業に対するイメージを書いた。私は時代の変化が速くなる一方である今、多くの企業が経営について見直さなければならぬと思っている。それは講義を受けた後も変わっていない。しかし、最初のイメージでは自分は企業の中にはいなかった。客観的に企業を見て、なんとかしてくれればよいのと思っていたように思う。それが最後の授業では、自分が企業で何ができるのか、企業が発展するための自分なりの役割が何であり、そのためにいま何をしようかという意識があるのを感じた。(MMF)
- 6) これまで生きてきた人生の中で、小さいころから何度も「企業」という言葉を聞き、成長してさまざまな知識を得てきた中で企業というもののイメージを作ってきました。しかしこの数回の企業論の講義とゲスト・スピーカーのお話を伺ってきて、そのイメージは大きく変わりました。大きな要因は、この講義の中で実際の企業の「現場」で活躍されている方のお話をうかがったり、現在活躍している企業家の出ているビデオを見たことにあります。そういった過程において生の声を聞くことができ「現場感覚」というものを持たせたと思います。(NAF)
- 7) 講義を通じて企業に対する考え方やイメージが変化し、企業というものをとらえるきっかけをつかんだように思われる。この講義が始まった当初は私の企業に対するイメージは、「非常に厳しいもの」というイメージがあった。もちろん非常に素晴らしい研究や開発を

行っている企業があることも認識していた。とはいえ、やはり近年のリストラや倒産などに代表されるように、厳しいというイメージがあった。どちらかといえばマイナスイメージの方が強かったように思われる。だが講義が終盤になるにつれて、企業に対するイメージが変化していくのを自分の中で感じられた。

確かに厳しいというイメージが依然として残っている。ゲストの方々の話を聞いて、そのようなイメージが強くなったくらいである。しかし徐々にプラスイメージへと転換していった。すなわち目的意識を明確にして常に改革(変革)を怠らなければ、「仕事を創造できる場所」と考えるようになったのである。

(TOF)

- 8) 最初に持っていた企業のイメージというのは、自分の立場だけを考えていて、辛いイメージだとか、あまりいいイメージを持っていませんでした。というのもおそらく今まで自分がどういう立場に立って企業を見ていたかを考えると、圧倒的に雇われる側の「労働者」の立場でしか考えていませんでした。しかしここに書いた人たちの多くも自分と同じようなイメージを持っていたようで、皆やはり「企業というものは厳しいんだ」というイメージを持っていたようでした。実際に僕は企業の中で働いたことはありませんし、そんな中でこういうイメージが強くなるということは、今の社会において同じような利益を受けることが多かったのだと思います。そして企業に対する考え方を大きく見直すきっかけになったのは、講義の中で行ったゲストスピーカーの方による講義でした。(YM)

- 9) 最終回のコメントでは、「今までは企業に対して、あまり体温を感じなかったが、講義を通じて人の活動が、うかがい知れて何か熱いものを感じた」と記している通り「そこで働く人に関心がいくようになったよ。(KT)

() ゲスト・スピーカー

- 1) ゲストスピーカーの講義は大変ためになったゲストスピーカーの講義はもう1回聞いて

みたい。(SM)

- 2) ゲストスピーカーの方々はそれぞれの分野で活躍している人ばかりであり、彼らの講義が時としてわれわれに厳しい現実を突きつけられましたが、それは現実的なものだったし、われわれの望む話であっただろう。(ST)

- 3) ゲストスピーカーを招いての講義は、毎回現場感覚の話が聞けて、これから就職を控えている学生にとっては衝撃的だった。現場の話聞くことで、興味のなかった分野に対する見方が変わったり、またほどよい不安と焦りを与えてもらったりすることができた。

(MAF)

- 4) ゲストスピーカーの講義は大変役に立った。また自分の能力を詰め直すことで企業と接するために必要な自分の能力を確認することができた。

まだ私がどのような企業に就職するか、漠然としか考えていないが、このような必要最低限の情報が分かったことは、自分にとって大きい。このことを糧に企業研究、大胆かつ慎重に企業の選択をしていきたい。(SD)

- 5) ゲストスピーカーの方々の招待講演は、実社会の様子を知り、大学生活の目標を立てる上で非常に参考になる。特に経済学部学生は将来的に Business の実践の場に出ることが多いと思われるので。(HK)

- 6) この講義は他の講義と比べて非常に特徴的で、特にゲストスピーカーの方々が直接講義をしてくれるのはわれわれ学生にとって非常にためになると思います。(KT)

- 7) 私がこの講義の中で最も刺激を受けたのはやはりゲストスピーカーの方々の話だ。社会の第一線で働いている人たちの生の声というのは、今回のように機会を設けないとなかなか実現できないことだと思うし、この講義の中で得たものが1番多かったように思う。(NK)

- 8) さまざまな分野から多くのゲストスピーカーの方におこし頂いて、貴重なお話を聞くことができた。やはり学生全員が現場に行っ

体験するという事は、できないだろうから逆に下まで長いこと経験を積んできた現場感覚をお持ちの方に来ていただいて、おはなしをいただくという形式は、自分にとって非常に斬新であり、非常に有益な分だった。このようなゲストスピーカーの招聘は、学生にとって得難い貴重な経験を提供するのであるから、今後ぜひとも続けていってほしいと思う。

(HK)

- 9) ゲストスピーカーから多くを学んだ。地域に根差した企業にしても、世界でグローバルに活躍している企業にしても、成功している企業には、それだけの理由があることが分かった。その産業、企業ごとに最も適合した企業戦略、経営戦略があり、優れた経営者、人材の下、先見性のある戦略によって、各々の企業の顧客ニーズに適合した、他企業の先を行く、製品サービスの向上の努力にあることがよく理解できた。現場の第一線で活躍している人の生の講義ならではの迫力と説得力を感じることができた。(DMF)

() 情報のフィードバック、共有化、累積

- 1) 授業ごとにコメントを出すことはよかったと思う。このコメントの内容については、人それぞれとらえ方も違ったと感じた。明らかに適当なおかしなコメントが毎回のように散見されたのは残念だった。その中でも他の学生のコメントを読むことで、200人近い学生の考えることなどを共有して知ったことというのは大きな勉強になった。そのコメントの中から新たな発見などがあったからである。

(NH)

- 2) フィードバックされたプリントからは毎回強く刺激を受けた。同時代の人たちが全く同じお話を聞いていたという、それぞれが違う感想を持つということは新鮮なことだった。ものの見方はひとつではないということを感じた。またコメントの中には自分とは比べものにはならないほど鋭い意見があった。それは自分とは全く違う視点から述べられた意見

であったり、同じような意見でも自分よりさらに一歩踏み込んだ意見であったりした。少しでも彼らの考え方に近づけるように努力しなければと思った。(SSF)

- 3) 毎回のコメントもレポートを書く際に非常に役に立った。自分が過去に何を書いていたのかを見ることで頭の整理ができた。(UK)
- 4) 初め私はフィードバックという講義を軽視していた。しかし何度かレポートを書くうちに、過去の自分がどのように考え、それが今の自分にどのように生かされているのかを考えることが、自分の思考能力の向上にとってどれだけ重要か思い知ることになった。

考えたことの記録をとることは、保存という面だけではなく、それを検証し発展させることで、新たな発見が得られる可能性がある。また自分を客観視することもできる。(NK)

- 5) フィードバックをすることによって過去の自分の考えを記録させるというのもいいアイデアだと思います。それと同時に授業に出席している人をきちんと評価してもらっているので、期末にテストをやって評価する方法より、毎回の出席とレポートで評価をしてもらえる。(FT)

- 6) 情報のフィードバックは同じことについて、200人がどんなことを考えているのかが分かって、考えさせられました。(UTF)

- 7) この講義では毎回コメント書くという作業をする。私が今まで受けてきた講義ではコメントを書いてもそれが手元に戻ってくるのではなく、まさに一方通行の状態だった。

しかし企業論の講義では、次の講義の時にコメントが自分の元に帰ってくる。これによって講義を受けた、それで終わりというのではなく、後に自分のコメントを見直すことにより、その講義の内容や、その時に自分が感じたことなどをフィードバックすることができるのである。このシステムは私たちにとって非常に有益なシステムであったと思う。(IK)

- 8) 自分の書いたコメントを後からフィードバック

- クすることはとてもよかったと思う。普段なら何かを考えっぱなしになる。(OKF)
- 9) フィードバックによる情報共有化は、大変自分にとって役に立った。なぜなら今自分は他と比べてどれくらいの能力を持っているのか、ということがはっきりし、危機感を持つこともできたからだ。自分と違う人の意見を受け入れるというのはなかなか難しいことであるし、360°の視点を持ち、いろいろな情報を手に入れることに大変役に立った。(FU)
- 10) レポートはすごく面白かったというのが実際ですが、それでもなかなか自分についてこういった文章を書く機会がないので、自分でも書きながら自分に対する新たな発見があったように思います。(KTF)
- 11) コメントの Feedback については、自己を振り返ることができるし、他の学生がどのように考えているのかを知ること大きい。それにまた刺激を受けるということもあるからだ。(WMF)
- 12) 大学を専門化するだけではだめだということです。最近は専ら産学協同と謳い、すぐに社会に使える人間の育成が言われていますが、大学は人間教育であると。当たり前のことなのですが、なかなか大学では感じられないので非常に新鮮でした。(OJ)
- 13) フィードバックについてであるが、こういうふうにして他の人たちの考えを知ること、講義を行っていくにつれ、その大切さを理解してきたような気がする。(SU)
- 14) ラベルのコメントについて、授業の終りに記入しているときは何も思わなかったのだが、並べて見てみると気がつくことがいくつかある。(AKF)
- 15) フィードバックのおかげで他の人がどう考えているのかを知ることができ参考になりました。(HUF)
- 16) 資料やラベルのフィードバックは後から見直せるのでとても役に立った。特にラベルは他の多くの人たちがどう考えているのかを知る貴重なものだった。(MSR)
- 17) フィードバック作業は同じ大学の同じ学部と同じ学年の生徒が何を考えているのかを知るうえで大変いい刺激になった。(AY)
- 18) 毎回フィードバックすることはとても良いことだと思います。講義の中で得たものを確認する作業だったように思います。また人の感じたことなどを、文字で見るというのも新鮮で刺激になりました。(YD)
- 19) ラベルの中にいかにその講義の感想を簡潔にまとめるか、とても至難の業であった。まとめる能力のなさ、語学力となさを痛感させられる授業であった。(NK)
- 20) フィードバックは同じ境遇の学生の考えが分かって大変興味深かったです。毎回楽しみにしていました。(MH)
- 21) 講義の最後に毎回ラベルを書いて提出し、次回にフィードバックされるというのは最初のころは必要ないのではないかと感じていましたが、他の人の考えを知ることの大切さや自分のコメントのレベルの低さがわかったような気がする。(OAF)
- 22) フィードバックによって中身のないコメントがあったり、考えさせられるコメントがあったりして、広く他の学生の考えを知ることができてよかった。(KMF)
- 23) 定期的なコメントの作成は自分の考えをこまめに書きとめ、問題意識の点検をする際に非常に役に立ち、問題意識の点検による自己の確認もすることができた。(EOD)
- 24) 半年間この講義を受けてきて、最近やっとノートテキングやフィードバックを日常生活の中で実践することができるようになった。(IM)
- 25) コメントのフィードバックはよかった。自分の考えを再確認できるだけでなく、他の学生がどのように感じているのかを知ることができた。(KK)
- 26) 毎回ラベルを集めてそれをフィードバックしてくれる点です。これも普段めったに目に

- することができないのと、学生の考えや発想がいろいろみえてためになりました。ただ数が多過ぎて自分のラベルを探すのが大変でした。(UW)
- 27) この授業の中で1番よかったと思うのは、レポート提出が何度かあったり、自分のコメントを分析したり、何度も考える機会が与えられたということである。(MNI)
- 28) 資料やラベルのフィードバックは、後から見直せるのでとても役に立った。特にラベルは他の多くの人たちがどう考えているのかを知る貴重なものだったのでとてもよかったと思う。(TAF)
- 29) 他人のフィードバックを見ることにより他人と自分と比較ができること。(MM)
- 30) 講義の参加者つまり他の学生の考えていることを毎回知ることができた。(OU)
- 31) 毎回の講義の終わりにコメントを書くのだが、最初はそのラベルを書く意味がよくわからなかった。しかしそれを続けていき、振り返ってみるとその時の考えと今の考えの変化が分かり、自分の考えを整理する上でとても役に立つことが分かった。また他の学生の考えも知ることができて面白かった。みな同じ講義を受けているのに、その受け取り方や物の見方は本当に人それぞれなのだと思った。(OK)
- 32) フィードバックでは自分のコメントの再確認が出来た。他の学生がどんなことを考えているのかも知れてとても参考になりました。(OM)
- 33) 企業で日々奮闘している方々は実際にさまざまな問題や現場に直面し、その都度そこから得られた情報をフィードバックして向上に励んでいるということを痛感しました。情報の共有化も図らなければならないと思いました。もっといろんな人と会話してギブ&テイクで情報の共有化をする主張があると感じました。(MT)
- 34) コメントのフィードバック。ともに学ぶ仲間が前回の講義で何を感じ、どう考えたかを共有できたことはよかったと思う。このような授業形式は初めてだった。(WD)
- 35) 1時間1時間の授業のフィードバックを積み重ねながら、自己変革を行い、そして自己を対象化した視点から、企業研究を行うことができた。(KHF)
- 36) レポートや毎回のラベルを書くことで、自分の考えや現在の能力を理解し、整理できたと思う。この講義では単なる経済理論とは違う「考え方」を学ぶことができたという意味でとても有益であった。(MH)
- 37) 講義最後小さなコメントを毎回書くことを通し、自分のその時々考えや企業に対する認識を目に残る形で表すことが、企業研究と自己認識に役立てることができる。(YM)
- 38) またさまざまな資料やフィードバックによって仲間がどのような考えを持ち、自分はどのような位置にいるのかも知ることができた。(ST)
- 39) 講義を受けている学生の考え方などがフィードバックされ、他の人が何を考えて認識できるのかは大変参考になりました。(KH)
- 40) フィードバックをすることによって過去の自分の考えを記録させるというのもいいアイデアだと思います。同時に授業に出席している人をきちんと評価してもらっているので、期末にテストをやって評価する方法より、毎回の出席とレポートで評価をしてもらう方法に賛成です。(FT)
- 41) フィードバックのおかげで他の人がどう考えているのかを知ることができ、参考になりました。(HUF)
- 42) 大学入ってから国語力の必要性を感じる人が多いのですが、毎回ラベルに要点をまとめさらにみんなで情報共有することによって、依然として乏しいのですが、多少国語力が身につきました。(KTF)
- 43) みんなの意見をフィードバックしていただいたおかげで、多くの新たな視野を得ること

ができました。(IME)

() 気づき

半年後の「経営学」の講義の開始された時点において、受講者へ「企業論」から学んだこと及びその Keyword の質問を行った。回答者100名の「気づき」=自己成長の契機は、図5に示すとおりである。3人目のゲスト・スピーカーである日産自動車児玉幸信氏のインパクトが、最も大きかったことを、示している。また全28回の講義の開始1/3の時点で、「気づき」を得た人が、累積約55%に達している。講義の成否は、開講後比較的早い時期にどれだけ受講者にインパクトのある内容を、展開するかにかかっていることも明らかである。

- 1) 私もこれから先どうするか、というより、どうしたらよいかということ具体的に考えたうえで、先に述べたようなスキルを身につけていきたい。大学でもいるんな方からたくさんの方の事を吸収し、広い視野で物事を見定められるようにしたいと思う。私はこういったことを企業論の講義で実感した。(TMF)
- 2) 私はこの講義の中で私なりに得たことが

(気づく)ことです。自分が置かれた何気ない生活からいかに問題点を見つけられるか。まず問題点を見つけることが私にとっての第一目標です。解決はその後です。そのために他社との比較も必要です。第一目標とはいってもこれから行うためには、またさらに多くの能力が必要となると思います。それらを重ねて成長できたらと思います。(IHF)

- 3) 毎回のコメントや資料などから情報をフィードバックし、この授業で学んだことを振り返ってみると、社会に対する考え方が積極的かつ具体的なものになってきたことに気がつきました。(KHF)
- 4) 1時間、1時間の授業のフィードバックを積み重ねながら、自己変革を行い、そして自己を対象化した視点から企業研究を行うことができた。(KHF)
- 5) 私はこの講義を通じて自分の能力について考え、思考法プロセスを見つめ直すことで、課題が多く見えてきました。自分のやりたい仕事をするにはどのような能力が必要か、またそれを身につけるために何をすればよいの

北海道大学経済学部学生 N = 100 (2004. 10. 8)

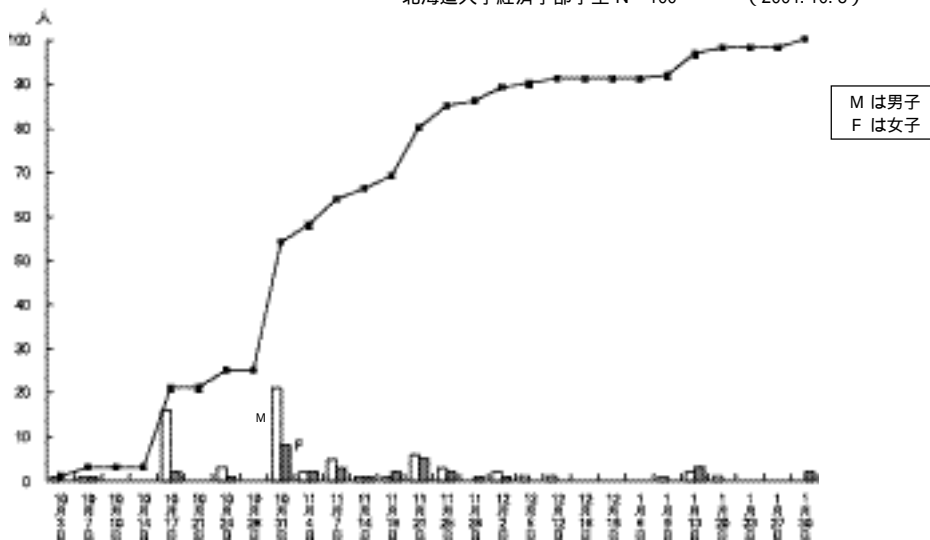


図5 自己成長の契機

- かということがわかりました。(SSF)
- 6) 講義を通して1つ重要なことに気づくことができたとは今は思っています。それは「考えを文章にすることの大切さ」です。(WMF)
- 7) この講義を受講して、人生の中の重大イベントである就職に向けて、意識改革とそれに伴った行動を促されました。それは周囲に遅れをとらないようにという焦燥感や危機感からではなく、自発的なものでした。(MT)
- 8) 会社が必要としての特異な能力ではなく、しっかりとしたあいさつや返事、として自ら積極的に行動していく能力などごく当たり前で基本的な能力なのである。(KTF)
- 9) 将来の不安を取り除くためにも今の自分の問題点に気づき、改善させ、自分のポテンシャルを引き出すことが必要であるということにも気づくことができた。(FH)
- 10) 私はこの講義を受ける前から、自分やコミュニケーション能力が不足しているということを感じていました。なぜそうなのかと考えたことはなかったのですが、この「思考を組み立てる」という能力が不足していることが原因なのだとということがわかりました。自分の思考をうまく組み立てることができないため、相手に自分が思っていることをうまく伝えられないのだと思います。しかし実際に社会に出て企業で働く際に、このコミュニケーション能力というのはとても重要なものです。(SSF)
- 11) 最初のうちは毎時間ラベルを書く意味や、ゲストの方の話を自分で要約することの重要性が、あまりよくわかりませんでした。自己分析の過程を行っていくうちに、その重要性に気づかされました。今まで自分が考えていた自分像と授業を通して見直した自分像には、大きな隔たりがあり、その隔たりの大きさに非常にショックを受けました。
- このように冷静に自己分析をする機会がなかった、自分に対してへんな自信を持ったまま、社会に出てしまうことになったかもしれ
- ません。遅すぎたかもしれませんが、今の段階でそれに気づくことができてよかったです。(AEF)
- 12) この講義で学んだことを踏まえて、卒業までに社会に出る準備を整えたいと思う。そのように今気づく機会を設けてよかったと思う。この講義を受ける前と、現在の私の意識が本当に変化したこと、いろいろ考え、悩んだことは、私の残りの学生生活、将来に向けた準備において、とても大きな役割を果たすと思う。このようにこの講義のいろいろな経験によって私の考えに変化をもたらすことができた。(OKF)
- 13) 授業に参加してたくさんのことを考えさせられた。今までとは違った考え方が少しはできるようになった。私たち大学生にとって就職とはいわばゴールだと思っていた。しかし今では、就職とはゴールなどではなく、ひとつの通過点であると思うようになった。(TY)
- 14) 自分にはこんな能力が足りないとか、能力をつけるための努力をしようと思い始めたのは、講義で刺激を受けてからでした。将来の職業について真剣に考えたのも講義の影響です。まだまだ始まったばかりなので、これからも自分をしっかり見つめ、努力する姿勢を続けたいです。(MS)
- 15) この授業を受けて日ごろから、物事についてもっと考えながら生活しなくてはいけないと感じました。
- また社会に対してどうにかなると思っていましたが、そうではなく自分でなんとかしなくては、と実感しました。(NS)
- 16) 私はこの企業論という授業によって、自分自身を見直すことができた。私が“自分自身を見直すことができたなあ”と思う最大の理由は、やはり自分の持っている能力を再認識するというところを、この授業ではできたからです。(YRF)
- 17) 今回自分のコメントであらためて強く感じ

たのは、イメージ性があるものと問題提起の可能性を含んだものがあるということだった。つまりこのコメントたちは研究する毎に必要な要素が含まれているという点で、非常に興味深かった。その様相をうまく利用して、研究課題を提起していくことが私の研究へのアプローチの一步だと思う。(IK)

18) この講義のすべてが企業研究へのアプローチに照準を向けていたように思う。私が今までに触れられる機会のあまりなかったそれにとっても刺激を受けたし、講義を受ける前と終わってしまった後では自分自身の心持ちが大きく変わったということも自覚できる。変化の速いこの時代に対応していく状況を引き止める力や柔軟に考える力を身につけていきたい。(WMF)

19) 自分の問題意識については、自分の探究心の少なさ、視野の狭さなどに気づくことができました。これらについては全く気付いてはいなかったわけではないのですが、自分を対象化することで問題点が明確に表れてきました。後は、残りの時間の中で自分がいかにその問題を解決するために積極的に動いていかだと思えます。(HYF)

20) 目標を定める 実行する 反省する 新たな目標を定める ……というような一連のプロセスが出来上がってくる。何となく行動すること、この一連の流れを意識に上らせつつ行動をするのでは、まったく結果が違ってくるはずだ。これが私が企業論で学んだ中でも最も重要なことだと思う。簡単で何気ないことのように思えるが実は非常に重要なことである。(DMF)

() 評価

1) 私の理想は、教養科目の1つにこういった講義が必修としてあることです。なゝなゝ学部に進級すること自体非常に危険なことだと考えるからです。(WH)

2) この企業論の講義における一貫したテーマが現れてくるように思われる。あらゆること

に対して主体的に接することの重要性ということが、自分にとっては今回の企業論に見出すことできたテーマだ。この時期に自分にとって社会活動における命題を認識できたという点でこの講義は本当に大きかったと思う。

(HD)

3) レポートや毎回のラベルを書くことで、自分の考えや現在の能力を理解し整理できたと思う。この講義では単なる経済理論とは違う「考え方」を学ぶことができたという意味でもとても有益だった。(MA)

4) これからの自分について実社会に出てからに重点を置かれる先生の授業は、独自の授業であった。企業とどのように付き合っていくのかを説かれる中で述べた内容には、今まで聞いたこともなかったような発見があり、驚かされることもしばしばだった。(OH)

5) とても有意義な授業でした。最初は企業の経営についての話が出てくるのかなと思ひ、少し疑問に思いました。しかしまず私たちに必要なのは、自分の意識や能力をしっかりとして総合的な能力を身につけることなんだなとわかりました。(UTF)

6) 最初は面食らったが、社会的に必要な能力の開発やゲストスピーカーを招いて「生」の企業に触れる機会を設けるなど、他の授業では得られない刺激を受けることができて大変よかった。(FM)

7) 企業論は私にとってとても新鮮な講義であった。明らかに今まで受けてきた全学教育、学部専門の講義にはないものだった。そして今までで1番自分のためになる講義であった。(MAF)

8) 自分の意識の再点検という意味でもやはり講義の意義は重要であった。残りわずかの学生生活で出さなければならないことが明確になったのだ。この講義で得られたことを今もう1度確認してあとは実践していかなければならないだろう。もしかしたら本当の意味でこの講義の効果が現れるのは、学生生活が終

わった先なのかもしれない。しかし講義を通じて得たことは大事に頭の中に残していこうと思う。(MK)

- 9) フィードバックやゲストスピーカーなど、他の講義とは違うスタイルのこの企業論の講義は、私に多くのことを気づかせてくれました。受け身的な講義と違い、学生主体であり、自己に向きあえる素晴らしい内容でした。

(KH)

- 10) 講義最後に小さなコメントを毎回書くことを通して、自分もその時々を考えや企業に対する認識を目に残る形で表すことが、企業と自己認識に役立てることができる。(KY)

- 11) 本講義は自分にとって非常に意味あるもので、自己形成に大きな影響を与えてくれた。講義の中で感じたこと1つ1つに、個々人に刺激を与えていこうとする試みがあったが、これは他の講義にはないものであった。情報を共有化することで感じる刺激や、講義内の教材から感じる刺激など、普段スポットライトを当てない分に対する意識を持つようになった。(MM)

- 12) この講義は学部の授業としては全く新しいスタイルの授業だと思います。専門的なことを教える学部の講義は、そのほとんどが1つの問題に1つの答えが与えられるような形なので、どうしても頭が機械的にしか動かなくなってしまう。

しかしこの企業論は、学生一人一人に考えさせる機会を与え、それぞれの中で問題と解決策を見いだす能力を養うとても良い講義だと思います。

たくさんの情報の中から自分が将来どのように生きていくべきか、ということを考えさせられるとても良い時間を与えてくれました。これからもこのような学生一人一人に自由に考えさせる講義が増えればよいと願っています。(HYF)

- 13) 企業研究へのアプローチとしてこの半年間の講義は大変役に立った。さまざまな産業の

企業をさまざまな側面から見る事ができたと思う。また自分の得意な分野やそうでない分野、また自分のやりたいことを改めて考えさせられた。このような実際の就職活動に役立つ講義を、1年前もしくは2年前に受講していれば、私の就職活動はもう少し変わっていたかもしれない。(TA)

()「経営学」

2004年度学部講義科目(経営学)においても同じ方法を、採用し産業界、地方自治体から合計7名(東京、関西からも含む)のゲスト・スピーカーを、招聘した。(表6参照)

学部学生142名(3,4年)を対象にした「ゲスト・スピーカー・システム」は、学生のコメント及び評価によっても実務の第一線で活躍する人の話を直接聞く事により現代社会は、多様な産業、企業、職場があり、そこに働く人に多様な人生と生き方があることを、共感、共鳴と共に理解することが可能になったことが明らかである。そしてゲストを鏡として自らの職業生活への基本的態度、学生時代に開発すべき能力を、明確にして取り組む姿勢を形成することに成功したのではないだろうか。

講義全体の基本目標は、「学習の身体感覚の回復」、「現場感覚の修得」、「聴く力の向上」、「手で考える」、「断片から全体像へ」である。また教員(ゲスト)と学生間の「情報のフィードバック」、「情報の共有化」、「情報の累積」のため学生の提出したコメント(40~60字)をまとめて印刷し、全員に配布した。

表6 2004年度 経営学 ゲスト・スピーカーとテーマ

年月日	テーマ	ゲスト・スピーカー
04.10.20	グローバル企業の経営	後藤 治夫氏 (元日本IBM)
10.27	ハイテク企業のR&D	福島 隆史氏 (シャープソーラーシステム事業部)
11.10	わが社の北海道進出/実績と展望	宮嶋 真由美氏 (大丸札幌店婦人服販売部)
11.24	中心市街地開発	村橋 保春氏 (三井不動産研究所)
12.1	十勝から発信する池田町	勝井 勝丸氏 (十勝池田町町長)
12.8	クロスファンクショナルチーム	児玉 幸信氏 (日産自動車人事部長)
05.1.19	積雪寒冷地の企業とR&D	井上 一郎氏 (光合金製作所会長)

ゲスト・スピーカー・セッションでは、毎回400～600字のコメント及び要約を、提出、要約を編集、印刷し、フィードバックした。ゲストからのコメントがある場合は、これも印刷してフィードバックした。学期末には、自分の書いた全てのコメントを、構造図解に展開、全体として何を学んだのか、レポート提出を課題とした。

この「経営学」の講義においても「現場の科学」に基づく新しい啓発教育の可能性を探検したが、講師と受講学生のやりとり、情報のフィードバックの累積によって、大学の教室と実社会（現場）との有機的関係の端緒が、開かれたといえよう。

学生の（ ）ゲスト・スピーカー、（ ）情報のフィードバック、共有化、累積化（ ）気づき（ ）評価に関するコメントは、次の通りである。2003年度に「企業論」を受講し、2004年度「経営学」を受講した学生には、明らかに学習の累積効果を確認することが、出来たであろう。

2004年度「経営学」

（ ）ゲストスピーカー

- 1) 他の講義では聞くことのできない、実社会で活躍する方たちの話は貴重である。さらにより多くの方たちの話を聞くことで、いろいろな価値観を知ることができ、それらを参考に自分なりの考えを出す機会が毎週与えられるのは良い刺激になった。(SHF)
- 2) ゲストスピーカーの話はとても刺激的で、現場を知るといってとても良いと思う。またさまざまな人の意見を聞くことは「ノートテキング」のレベルアップに効果的だと思う。(KST)
- 3) 最も学生に必要なことであり、これからの大学講義で取り入れていくべき方式だと思います。昨年企業論では社会で働くことを考える契機となり、インターンシップへの参加の動機付けとなりました。また今回の経営学では就職活動を行っていく上での心構えを教えてくださいました。(MMF)
- 4) 企業論と同様ゲストスピーカー方式は、私たちの知的好奇心をおおいに刺激してくれてよかった。(KKF)
- 5) 社会で活躍している方の「生」の声をじかに聞くことができるので、とても有意義な時間を持つことができたとと思う。(KMF)
- 6) 去年の企業論に続いての授業となり、ゲストスピーカー方式もすっかりなじんだが、それでいて相変わらず新鮮な感覚があるのは、毎回のGuestがそれぞれ違った分野の話を当事者の立場から語って下さるため、どの回も思いもよらない角度から思考するきっかけを得られるからだろうか。(TMF)
- 7) 児玉氏のように同じゲストスピーカーの方に時間を経てから、またお話しをしていただいたり、村橋氏のように何度もフィードバックを続けたりするのが、去年の企業論にはなかった試みでとても新鮮でした。(FTF)
- 8) 現実の社会で働く人の生の意見を聞ける機会が学生生活の中では少ないので、毎回良い時間だった。現実社会の厳しさを知ると同時に、自分も社会に早く出て挑戦してみたいという気持ちになった。就職活動の会社説明会に行くが、授業で聞いた生の声と会社の人事の人の話が、共通していたので理解しやすかった。(KAF)
- 9) 講演を通じて、企業や社会の現状に触れることで、教科書上の用語ではないメッセージを聴くことができ、今後の自分の課題を作ることができた。(MYF)
- 10) 現場の方の生の声を聞けることがリアルで、非常に興味を引かれるというのは企業論の時にも感じたことであるが、今回は就職がよいよ迫っているということもあってだろうか、早く就職したいという気持ちを強く感じた。(MAF)

- 11) ゲストスピーカー方式は本当によかったと思う。教科書からもさまざまな知識情報を得ることができるが、やはり生の企業の方々の声を聞くことでもっと説得力のある意見、情報を得ることができたと感じている。それに聞いた話にもっと興味がもてるようになった。(SMF)
- 12) 実際に生の声を聞くことができ、とても有意義な時間であった。インターネットや新聞でも、社会で活躍されている方々のインタビューなどが掲載されるが、実際にお話を聞けるのとは大きな違いだ。その方の目の輝き、体中から伝えたいという意思の表れ、躍動感等すべての所作が、大学生活の大半を受け身の授業で過ごしている私たち学生には刺激的であった。それと同時に私はあと数年後にはこの方たちと肩を並べて働くのかと思うと不安でもある。不安と期待とすべてを受け入れて、今後の就職活動にまい進しようと決意をした。(IMF)
- 13) 就職活動を目前にした今回のゲストスピーカーを交えての講義には、去年には感じられなかった切実さを学びとることができ、よかったですと思います。さらに疑問、推論、実証、結論の知的作業の繰り返しこそが大学を卒業し、社会に出ても通用する重要なスキルのひとつであることが身をもって感じられた半年間でした。考えて、考えて考えぬくことの先には、必ず自分の求めていた答えが得られるのだと思います。(NMF)
- 14) この方式は企業論に引き続き、多様な人々の話が確実に「刺激」となるため、良い方式だと思います。他の講義と同じように進めても、確かに知識を養えるかもしれませんが、思考することについての刺激は足りないでしょう。そのような講義ばかりでは大学生は自分で考える力をどんどんと失っていくように思います。(WMF)
- 15) ゲストスピーカーの方々のお話から学んだことを自分なりに解釈し、自分のものにして、それを実社会の中で活用し、生かしていくことが大切あると思いました。そのためにも知識の獲得 気づき 経験の蓄積 人間の成長 志の形成 気づきのサイクルを繰り返し実施することが重要であり、そのサイクルを継続し積み重ねていくことで自分の人生目標が見えてきて、少しずつその実現に近づいていくのだと感じました。(DMF)
- 16) ゲスト・スピーカー方式については、去年に引き続き大変素晴らしいと思う。経営系の講義にしても経済系の講義にしても、すべて理論の学習では正直言ってつまらない。教科によってテーマは違っても、教えることはほとんど変わらないという講義があるし、それらはだいたい専門科目に慣れた3年のころから出てくる。講義内容が他領域と幅広く関連していることは理解できるが、それでも1度聞いた話をもう1度聞くのは私の場合は、時間の無駄に思える。だからこのスタイルの講義がとても新鮮で毎回違った話を聞けて、あたかも企業訪問をしているかのような感じであった。(MAF)
- 17) 今回児玉氏のゴーン改革その後についての話が非常に興味深かったです。今回のように長期的にひとつの企業(組織)の動きを知るような機会が増えると嬉しいです。(NK)
- 18) 以前企業論の講義の時も思ったのだが、ゲストスピーカー方式という授業形態は素晴らしいと思う。なぜなら今回の僕がそうであるように、たとえ理解していると思っていた事柄でも、実際に社会に出て働いている方々の口から生の言葉で聞くと、その重みが全然違って来るからである。確かに知識を情報としてただ頭に入れるというだけを目的とするならば、普通の講義でも良いかもしれない。しかしどうしてもそこからはゲストスピーカーの方々から感じるような刺激というのはなかなか得られないと思う。(IM)

- 19) やはりゲストスピーカー方式というのはいいと思う。特に今年は就職活動もしながらだったので、企業の話は昨年よりも実感がわいてきて非常にためになった。(KA)
- 20) ゲストスピーカーの話はとても刺激的で、現場を知るといってとても良いと思う。またさまざまな人の意見を聞くことは「ノートテキング」のレベルアップに効果的だと思う。(KT)
- 21) 企業論と経営学も受けることができたのだが、やはりゲストスピーカー方式というのはいいと思う。特に今年は就職活動もしながらだったので、企業の話は昨年よりも実感がわいてきて非常にためになった。(KM)
- 22) ゲストスピーカーの講義は昨年も企業論で受けさせていただいたが、本当に多くを吸収できる講義だと思う。大学の教授方の授業のような講義とは違い、これから自分たち学生が出ていく社会での実体験やそこで必要になってくるようなことばかりなので、より真剣に聞けるしまた話も聞きやすい。ゲストスピーカーの方たちの話の展開がうまいということもあるだろうが、実際に企業など現場で働く人の話はなによりも説得力があった。(SK)
- 23) 普通の講義の場合は理論やケーススタディなど過去にあったことやすでに構築されたものをメインに教えてもらっていた。そのためリアルタイムで世の中がどうなっているかをよく知ることができなかった。しかしこのゲストスピーカーの方々の講義から、今現在社会がどのように動いているのかを垣間見ることができた。しかも業界のこと以外にも働くうえでどういったことをいつも心に持っているかとか、働くときの心意気や志などを教えてもらうことができ、自分の内面に良い影響を与えてくれた。(FH)
- 24) 以前企業論の講義の時も思ったのだが、ゲストスピーカー方式という授業形態は素晴らしいと思う。なぜなら今回の僕はそうであるように、たとえ理解していると思っていた事柄でも、実際に社会に出て働いている方々の口から生の言葉で聞くと、その重みが全然違って来るからである。確かに知識を情報としてただたまに出るというだけを目的とするならば、普通の講義でも良いかもしれない。しかしどうしてもそこからはゲストスピーカーの方々から感じるような刺激というのはなかなか得られないと思う。(IM)
- 25) 講師ら1人で講義する通常の授業と違い、毎回違うゲストを招き、お話を聞かせていただけこの方式は非常に新鮮であった。昨年から通算すると相当数の方の生の情報に触れたことになり、それは僕の成長の糧になっています。
- 毎回非常に興味深い話を聞くことができたので大変よかった。必要な思考方法、計画立案の方法、求められる人間像といったことを現場にいる人から直接聞くことができるのは、モチベーションが上がり、これからすることを明確に描くことができるといった点でよかった。(SK)
- () フィードバック、共有化、累積
- 1) 企業論のフィードバックは、その場で書くコメントのみだったが、今回はレポートも課せられた。これは自分の考えたことを見つめ直すためにも、必要なことだったと思う。コメントのみではどうしてもその場限りで忘れてしまうことがあるが、1度家に帰ってみてから思い起こし思考すると内容を思い出すとともに深く考えることができた。(SRF)
- 2) 村橋氏のように1度ゲストとして来ていただくだけではなく、何度もフィードバックをすることは、以前とは違ったもので凄くよかったと思います。(WMF)
- 3) フィードバックから新しいものを考えることが重要だと思う。(SNF)
- 4) フィードバックしてみなければ分からなかったが、私は自分では気が付かないうちに確実

- に成長していた。さらに私の進路はこの2つの講義に導いてもらったといっても過言ではないと思う。(KNF)
- 5) 週1回という限られた時間のため村橋氏の回にしか授業中にフィードバックすることができなかったが、ミニレポートを書くことで、毎回自分の中で整理することができたと思う。(KNF)
- 6) フィードバックと最後のまとめもあり、すべてを通じて多くのことを学んでこられたと思う。(UYF)
- 7) 村橋氏のようにフィードバックをしてくださる方もいらっしゃるって、深く考える機会を持つことができたと思う。(SHF)
- 8) 村橋氏の講義にあたっては村橋氏本人によるフィードバックがあり、実際の講義で何を伝えたかったのかということや、学生がどのように学んでいくべきかという掲示があり、より有意義な授業になっていたと思える。(OK)
- 9) コメントのフィードバックによってともに学ぶ仲間の考えや意見を知ることができてよかった。さらに村橋氏から2度にわたるフィードバックもよかったと思う。(WM)
- 10) 毎回フィードバックの時間を与えられてよかった。普段かかわりのない学生の考えも理解できたし、去年のフィードバックと見比べると確実に自分が成長していることが分かりうれしい。(INF)
- 11) お話を聞いた時にそれで終わりではなく、後にフィードバックすることでただ聴いて終わりの時と比べ、何倍も意義のあるものになったと感じた。(ONF)
- 12) 講義によって得られた知識から、気づきさらにフィードバックして志の形成を目指そうとするならば、ゲストスピーカーの刺激はなおさら重要になってくる。(IN)
- 13) ミニレポートを書くという前提で話を聞くので集中力を保つ意味でも重要で、それが再びフィードバックされてくるのでやる気も起きます。そういう意味で村橋氏の再フィードバック、再々フィードバックは非常に学生にとって良い影響を与えたと思います。(ON)
- 14) ゲストスピーカーから自分の考えを導きだし、フィードバックして再考するという方式は、自己を高めるうえで非常によい手段だと思う。これまでにはなかった講義のやり方で手ごたえがあった。全体的に密度の濃い講義で自分から率先して内容を分析することができた。(UN)
- 15) 学生間での情報のフィードバックのみならず、学生と Guest の間でのフィードバックは講義形態としては珍しい。(WT)
- 16) 村橋氏から何度もフィードバックをいただくことができ、貴重な経験となった。他の講義ではあり得ない経験だと思う。このような動的な講義が他にも増えるべきだと思った。(4FK)
- 17) フィードバック方式も一つの特徴であるが、今回はゲストからのフィードバックもあり1つの相乗効果も生まれたと思う。自分の考えできたことをたどり、思考をしていくことが出来るという意味でこれも有効であった。(SU)
- 18) さまざまな課題はゲストスピーカーのお話をもう1度振り返り自分のものにするいい機会になったし、何事もフィードバックする癖がついた。(AK)
- 19) 自分たちの意見がフィードバックされる、というのはやはりよかった。自分だけでなく周りの人たちの意見が見られたのはとても興味深く参考になった。(OJ)
- 20) 講義の最後にコメントを提出し、次の講義でそれらを私達にフィードバックしてくれるという点で、自分の回りの人たちは、どのようなことを考えたのか、参考になり、自分とは違う意見、異なった視点で見ている人もいて、そのような考え方もあるものかと新しい

- 発見にもなりました。(AH)
- 21) 講義ごとにコメントを提出するという方法は、講義内容をその時に自分なりに考え形に残すという点で、情報を共有化しフィードバックするという点において非常に大切なことであり、よいことだと思う。(SN)
- 22) コメントのフィードバックに関しては、同年代の他のみんなが同じ話を聞いて何を思い、何を考えているのかを共有することができるということは非常に有意義なことだと思います。友達のコメントに刺激を受けることもあり、他の人のコメントをみて自分の位置づけでいいものもおおよそ見当がついて、今の自分に何が足りないのか、または何が長けているのか自覚できると思います。そういうことを授業でお話を聞いていただけでは気づかなかったことも、気づくことができるような機会が増えると思います。(NT)
- 23) いつもコメントのフィードバックをすることによって自分がこの前の講義で何を考え、この次にどういったことをすればよいか、自分で思い出せたり、考えたりできたのでステップアップに有効的につながったと思います。(TM)
- 24) フィードバックを数多くしてくれたのも非常にいいことだと思った。他人の考えを読んでも、気づかなかったことに気づかされたり、自分の成長の度合いを測ることができたりすることにおいて、フィードバックという方式はプラスに働いているといえる。他人と考えや異なることは、自分がダメだということではなく、いろいろな考えがあるということで、さまざまな知識を吸収できるチャンスを得ているということだ。逆に同じ考えもあって“一人じゃないんだなあ”と実感したりもした。(ST)
- 25) 毎行われるコメントのフィードバックを読むとあの学生が何を考え、何に悩んでいるかを知ることができてすごく参考になった同時に同じようなことを考えている人を見つけると勇気付けられもしました。(FA)
- 26) フィードバック方式について、講義終了後にラベルを書き、自宅でレポートを書き、次週にラベルを見直すという過程をたどることで自分の考えの変遷をたどることができる。その中で自分の意見を改善することもあるし、単一であった考えが複合され、新しい発想が生まれることもあった。反面今まで自分の考えをフィードバックするというをしていなかったのも、不慣れで戸惑うこともあり、この講義の意味をすべてくみ取ることができたかという不安が残る。(4YT)
- 27) 受講する前は書くという行為についてそれほど意識するようなことはなかった。書くという普段から日常の中で当たり前のように行っている行為が、実は自己の能力を開発し、創造性を高め、さらには自己を振り返るためのフィードバックの材料として非常に重要な意味を持っているのである。(4IT)
- 28) 講義ごとにコメントを提出するという方法は、講義の内容をその時に自分なりに考え形に残すという点と情報共有化しフィードバックするという点において非常に大切なことであり良いことだと思う。(SM)
- () 気づき
- 1) 自分の講義への取り組み方について考えると、やはり昨年の企業論でノートテキングの重要性が強調されたためか、聞く能力が少し向上していた気がする。どんな分野の話にも真剣に耳を傾け、自分と関連付けて考えたりすることも自然に行うようになっていた。(FEF)
- 2) 私は企業論や経営学の講義ほど「学んでいる」、「自分が成長している」と実感した講義はない。講義の度に、必ず何か心揺さぶられる情報を得て、いつも体中が、満たされているような充実感があった。(MMF)
- 3) 自分自身を見つめ直す、まさに自己分析に

- 体系的な道筋を示してくれるような授業だったと思います。(FTF)
- 4) 企業論の時から比べ、講義をただ聞くのではなく、手を動かしながら考えながら聞くという姿勢が身に付いたのは自分の目に見える成長だと思う。知識が大切だが、応用がきかないと全く意味のないものだということも十分理解できた。(KTF)
- 5) 私は企業論を受講し、それからちょうど1年後に経営学を受講したことで、非常に良いタイミングで、ゲストスピーカーの方の話を聞く機会を得ることができたと思っている。フィードバックしてみなければ分からなかったが、私は自分では気づかぬうちに確実に成長していた。さらに私の進路はこの2つの講義に導いてもらったといっても過言ではないと思う。社会という現場に出ていく道標は、やはり現場にいる社会人の方から与えられるのだと痛感した。就職を決定するという自分の人生における大切な節目に、この2つの講義を受講することができて、本当に幸運であった。毎回のミニレポートによって適時に自分の考え方をFeedbackできたことも、ゲストスピーカーの方や先生の講義の内容を秩序立てて、自分の人生設計に生かせる要因であると思う。(KHF)
- 6) 企業論の時よりも講演から何かを得ようという気持ちが大きくなり、話を聞くだけではなく、そこから自分で考え、自分のものにするという能力がついたように思う。(SAF)
- 7) 去年の企業論でノートテキングの重要性を知り、今年の経営学でそれが実践できていることに気づいたとき、自分の成長ぶりを感じた。人の考え方や性格は1年くらいでは簡単に変わらないだろうから、ちょっとでも成長したことをほめてあげたいし、小さな成長でも気付いたことが素晴らしいと思う。このように1年前の自分と現在の自分を比較できる授業は良いと思う。普段過去の自分を振り返り、現在の自分と比較する機会というのはめったにないだろうから。(SMF)
- 8) 自分自身を見つめ直す、まさに自己分析に体系的な道筋を示してくれるような授業だったと思います。(FTF)
- 9) 大学の経営学の講義の大部分は、アメリカの教科書をただ教えているというものの多い中、ゲストスピーカーの方に来ていただいて現場の声が聞けるという先生の講義の進め方は、非常に有意義なものであると感じました。多くの方のお話を聞いているうちに、私の考え方に変化が生じ、今までの自分を反省するようになりました。このように私には、大変興味ある講義だったと感じています。(NH)
- 10) この講義では、学び方を学ぶということも提供されたと思う。自分自身の学び方を図解し、形にするということは、自分自身の生き方を明確にするということであると思う。(HK)
- 11) 経営学の授業を通して私は、ものを深く考えるという習慣がついたように感じます。これから就職活動が本格化しますが、企業論Iと経営学を通して学んだことを生かし、自分を見失わず挑みたいと思います。(KH)
- 12) 2年にわたって、先生の講義を受け、たくさんの方のゲストスピーカーの方々の生の声を聞くことができ、本当に考え方や行動の仕方が変わったと実感しています。このゲストスピーカー方式はぜひとも続けて行ってほしいと思います。これまでの講義にはなかった大きなものを得られる授業であり、一つの経験として積み上げていきたいと思います。(HK)
- 13) 全体の中身としては自分が成長するためにはいかに行動するかといったような普段なかなか考えられないようなことにまで目を向けることができ、さらに多くの新たな知識を手に入れたように思う。大学にしながら社会に近い雰囲気を感じることができた授業だと感じ

- られた。(OD)
- 14) 自分の頭で考えることの重要性,それは頭ではわかっているがいざ実践しようとするとなかなかうまくはいかないものです。さらに日本の学校教育では,自分の頭で考えることを促すようなカリキュラムにはなっていないようにも思えます。
- しかしこのように感じるのもそもそも受動的な行動や考え方をしているからだと思います。結局はいかに能動的に行動できるかが大事なことだと思います。この授業ではそのことに気づかせてくれるし,どうすればよいかを能動的に考えさせるよう促してくれると感じました。自分にとって生涯をどう生きるかを考えさせるくれる契機となった授業でした。(NH)
- 15) 自分たちにとって漠然としたことを教えるのではなく,将来について身近でしかも大事なことを教えてもらいました。それによって自分の甘さなど気づかされて,しっかり物事を考えることを学びました。(KS)
- 16) この講義方式は,企業論の時にも経験したものであるが,独創的で他の講師の方々とは一線を画している。2年,3年と講義を受けてきた我々にとって,この講義は1種の薬みたいなものであり,我々を受動的な学習の世界から引き出し,能動的な学習,行動の世界に連れ出してくれる薬だった。ゲストが来て現実社会の物事を講義してくることで,企業等で働いたことのない我々にまるで働いているような感覚を与えてくれた。まさに「現場感覚」だと思った。(SY)
- 17) この経営学は企業論と同じく,自己変革に通じる講義である。ほかに自己変革を考えさせられる講義はあまりない。ほとんどの講義は知識を詰め込むことに専念されている気がする。あらかじめ答えが決まっていて,それを覚える形の講義である。そのような講義と違い,経営学は「自分の知識を生かし,自分なりの答えを見つける」講義,もしくはそうできるようになるための講義であると思う。(WD)
- 18) 講義内容も首尾一貫していて,これからの自分に必要なことを感じ取ることができ,またそのために必要な行為を実践することもできた。今の自分を見つめ直し今の自分に与えられている課題を発見できたので,とても良い機会になった。(NY)
- 19) 私たちは在学中に良いタイミングで2回も講義を受ける機会があった。2回受けることで以前の自分と比較することができた。実際講義中にピックアップできたキーワードの数は以前よりも格段に増えた。このように身をもって自分の成長を感じることができ,人生に大きく影響を与える講義となった。(AH)
- 20) 先生の伝えたいメッセージが2年目になってようやくわかった。現場の声を伝えることで混沌とした中から自分をしっかり見つめなさいということが個人的には伝わってきた。(HH)
- 21) 去年の企業論と今年の経営学の授業で先生やゲストスピーカーの方々から学んだことは本当に大きい。知識を増やすだけでは社会に出ても何の役にも立たない。「考える力」,「論理的にも説明する力」,「なにが問題であるかを見つける力」が最も大切なんだということを学んだ。またゲストスピーカーの堂々とわかりやすく話す姿を見て,プレゼン能力向上の必要性も感じた。この授業によって自分の欠点,今後身につけをつけるべきことが再確認できたことは自分にとって大きい。(SD)
- () 評価
- 1) 去年の企業論の時にはなかった毎回のレポートが,講義の内容や感じたことを自分の中で整理する上で役に立ったと思う。教科書を読み進めるのがメインの講義が多い中で,今回の経営学のように「話を聞き,自分でまとめ

- る」という講義がある意味は、大きいと思うし、実際に毎週楽しみだった。(OAF)
- 2) 教科書に沿った学習ではない経営学の授業を受けたことで、これから自分がやらなければならないこと、身につけなければならないことをたくさん教わることができた。(MYF)
- 3) 毎回書く事もこの講義では当たり前のことになっているが、これも私にとってはこの講義を高く評価する大きな要因のひとつである。量は多くなくても、毎回書くという作業を通して、素通りしてしまうところだった思考を振り返り、自分がこんなことを感じていたのかと自分で知ることができる。たいしたことはないようだが、この作業があるかないかで、自分がこの講義から学ぶ量にも質にも大きな差が出るだろう。(MAF)
- 4) 先生の講義やゲストスピーカーの方々から多くの知的刺激を受け、知識統合の重要性や組織との付き合い方など、今後社会に出る際に理解しておかなければならないことを数多く学ぶことができた。常に現場感覚を持って行動しなければならないと認識した。(HAF)
- 5) 3年間いろいろな講義を受けてきたが、ここまで“自分自身について”深く考える機会を与えてくれる講義はなかった。毎日をなんとなく過ごしていた自分に「これではいけない」という黄色信号を与えてもらったような気がする。まだまだ改善の余地はある自分の生活ではあるが、改善点に気付いただけでもよかったと思う。(NAF)
- 6) この講義は広く話を聞き、社会について知るといった目的がはっきりしていたので、うまく融合された授業になっていたと思う。フィードバックと最後のまとめもあり、すべてを通じて多くのことを学んでこられたと思う。興味が持てた授業に積極的に参加できる形になっていたのも、全体としてとても満足している。(UYF)
- 7) ノートテキングは早いうちから意識して取り組んでいたのも、自分の考えや意見を文章にすることが以前よりも楽にできているような気がする。いろいろな授業を受けてきた中で経営学と企業論は、1番知的刺激の多い事業でした。(TKF)
- 8) 「自分の頭で考える」重要さを、身をもって感じる事ができる講義だったと思う。(SAF)
- 9) 今期に感じたのは2年次からの継続的なつながりのある講義体制の体系的なすばさにも触れられたことだと思います。継続的に考え実践すること、先生自らが現場感覚を失わずに取り組んでいる様も学生全体への知的刺激になったと思います。(NMF)
- 10) 経営学、企業論の講義は初志貫徹していて、教授が何をおっしゃりたかったか、何を学生に伝えたかったのかがよくわかりました。ただ経営学や授業を教えるのではなく、人として最も重要な人間性を教えられました。義務教育や高校の縛られた空間では、教師の考え方も浸透しやすいですが、大学という解放された空間で、半年、週に1度か2度の数少ない機会でも伝えたいことを伝える、というのはとても大変だと思います。少なくとも教養の授業を含めここまでメッセージを受け取れたのはこの授業しかありませんでした。(FTF)
- 11) この講義形式は特殊であるということが言えます。外部からの講師を招き、現場の感覚を磨くということに関しては非常に有効であり、学生の知的刺激なっていると思います。またミニレポートを書くという前提で話を聞くので、集中力を保つ意味でも重要ですし、それが再びフィードバックされてくるのでやる気も起こります。そういう意味で村橋氏の再フィードバック、再々フィードバックは非常に学生にとって良い影響を与えたと思います。(ON)

- 12) 大学での今までの講義を通じて私が考えたのは、大学には創造性や個人の主体性を養うような教育はまれで、受動的で、ただ知識の蓄積にしか作用していないように思われました。当然知識の蓄積自体は悪いことではないのです。しかし受け身の学習には思考に一定の枠をはめ込んでしまうような傾向があると思われるのです。経営学は少なくとも私には、学生一人一人の主体性を確保するために非常に大きなヒントになっているといえると思います。まさに「考え方を考える」ということを学んだと思います。考えるのですから、当然個人によって全く違うものになるでしょうが、個人の主体性という点からいえば、程度の差こそあれ皆学んだものは同じなのかなとも思いました。(TK)
- 13) ゲストスピーカー方式は一言でいうならば、大学の講義の中で最も効果的な学習である。机の上で議論ばかりを学んでいる私たちにとって、現場で活躍されている方々のお話を聞くことは、社会の現状を知るうえで大きな助けになり、タイムリーな事実を知ることができた。またさまざまな分野の方の意見を聞くことは、知識を広げることもつながった。大学生に1番必要なのは生の声を聞くことだと感じた。(WD)
- 14) ゲストスピーカーの方々から聞くことができたお話しは非常に有益でした。いま改めて企業論から続くこの方式と先生の話振り返ってみると、自分を高めることに関して一貫性があり、大学における授業において最もためになったと思います。それらを聞かせていただく自分の意識が初めからしっかりしていなかったことが悔やまれてなりません。(TY)
- 15) 昨年度の企業論とは異なり、毎回ゲストスピーカーの講義ごとにミニレポートを書き、文章として保存することで、期末レポートを書く際に非常に有効な資料とすることができた。(FT)
- 16) 昨年に続いてこのような機会が得られたということは、また新たな知識や経験を積むことができたということ。昨年の自分と現在の自分を比較して分析することができたという2つの意味で非常に内容のある講義でした。(NR)
- 17) 全体としても非常に「実践」という作業が講義の中に盛り込まれており、獲得できた情報の整理、定着、確認といった作業をできてよかった。(SK)
- 18) 評価したいのは学生に毎回レポート課題として与え、自分の中で再構築させていたことである。(SD)
- 19) 経営学という名前から連想される企業のマネジメントではなく、本当に企業で働くために必要なことを学んだ。(TY)
- 20) 全体としては自己啓発に近い感じでとても刺激的なプログラムであったと思う。知識を学ぶその他の講義とは違い、考えさせられることが多かった。自分にとってそのような機会はあまりないので、とてもためになった。今現在就職活動を行っているが、自分の将来について考えるうえでとても役に立っている。(MY)
- 21) 全体を通して考えさせられるところが多く、また自主性、主体性を身につけられるという意味でとても良い講義であったと思います。(NS)
- 22) この経営学は特殊な講義で、外からのゲストスピーカーを招いての講演になっていて、新鮮味があって受ける側から見ると楽しいな講義でありました。他の講義はもっと抽象的な学問の講義がほとんどなので、それが実際の現場でどのように役に立つとか、また役に立たないのか、その確認の場といってもいい機会をもうけていただいたと思っています。(DK)
- 23) 大学教育は学問教育と人間教育の2つの側面を持っているが、大学を人材育成の場として考えれば、むしろ人間教育にこそ重きを置くべきであると私は思う。

にもかかわらず現在のカリキュラムによるとそれを目的にしている講義は決して多いとはいえない。その点本講義は貴重な講義であり、自分を成長させてくれるうえで実り多い経験を蓄積できたと思う。(YD)

- 24) 最終レポートを書くことによってコメントを最後に見直し、自分がこれからどんなことをすべきかを、改めて思い出せました。だからこの講義は自分の能力やこれからの自分に何が足りないのかをしっかりと見つめ直すおりとても良い授業だったと思いました。(TM)

5. 結論

従来の抽象的概念や理論の解説を中心とした大学教育は、学生の理解度(記憶力)をペーパーテストで評価するに過ぎない。21世紀に生きる若い世代に求められる問題発見、問題解決能力の開発には、極めて不十分な内容となっている。明治以来の歴史的惰性であるキャッチ・アップ型思考では、先進モデルの模倣に終始して、自らのアイデアと構想力を生かして主体的に問題に挑戦する勇氣と情熱を、持つことは出来ない。現場から独自のモデルを構築し、さらにそれに基づく問題解決の実践には、遥かに及ばないのである。我々は、自らの直面する問題の人類史的な先端性を自覚することが肝要ではないだろうか³²⁾。

現代の大学教育は、高度に抽象化した理論、専門化、細分化した理論から、出発するのではなく、学生の「原体験」、「原風景」を基礎にして、五感と直観を働かせるステップを、着実に踏むことを重視すべきではないだろうか。最初から既存の情報に依存するのではなく、まず現場、現物、現実に直接触れる経験から思考をスタートする訓練を、行う必要があるだ

32) 市川亀久弥(1970)『創造性の科学』日本放送出版協会

ろう³³⁾。

他人の働く(生きる)現場に直接触れて、共感と共鳴ともに理解し、我が事として受け止め自らが働く(生きる)場において協働して問題解決に取り組む志と姿勢を、涵養することが、重要ではないだろうか。そのためには大学を「世界に開かれた公共空間」として位置づけ、異質の交流(社会的異部門間、異専門間、国際)を実現する。これにより「教室」を、非日常空間すなわち「現場」(フィールド)に転化しうるものが、可能となる。学生は自らの五感と直観を働かせ、手を動かして作成した「現場」のデータ(情報)の共有化、フィードバック、累積によって問題の全体像を描き、その構造を把握して、問題解決の見取り図を作成することが、可能である。

事例研究の意義は、専門的知識やマニュアルを学習することではない。事例(他者の世界)を鏡にして己を映し出して、等価変換思考を進めて問題を発見することである。さらにはまた問題解決の構想と具体策に至る思考のフルコースを訓練することにある。そのためにはMBAコースの失敗によって明らかのように既に情報化された「事例」の分析に中心をおいてはいけない。未だ情報化されていない“生きた全体”に直接触れることが、必要なのである³⁴⁾。

21世紀の世界市場経済は、全てのものの商品化を推し進めているのである。人間が、単なる“労働力”になること、情報化と断片化によってシステムの部品になることを加速化させ

33) 米山喜久治(2005)「戦後日本におけるブレンストーミングの導入と伝播」『日本労務学会全国大会研究報告論集』(第35回)

高宮 晋(1976)『日本の経営教育への提言』産業能率短大出版部

村本芳郎(1982)『ケースメソッド経営教育論』文眞堂

34) H. ミンツバーグ/池村千秋訳(2006)『MBAが会社を滅ぼす』日経BP社
日本の現場を全く知らない外国人MBA取得者の受け入れ拡大は、大きな時代錯誤ではないか。日本経済新聞 2006年6月22日号

ているといえよう。地球環境の悪化は人類を含むあらゆる生物にとっての生存条件の絶対的悪化を意味している。激変する地球環境に対応した新しい人類社会の構想は、未来に生きる若い人々の頭脳から期待することが、可能であろう。

大学における啓発教育の目的は、人々の潜在能力と創造性の開発、さらには人間性の解放を促進することにある。そのためには「現場の科学」の方法論を導入して、既存の情報に過度に依存する文献・理論偏重のカリキュラムからの脱却が、必要である³⁵⁾。「現実性」と「現代性」

を回復する場の設営及び新しい教材開発が最重要課題であるといえよう。

〔謝辞〕この国の将来を担う若い人々の啓発教育には、社会的部門を越えた協働こそが、重要であると考えます。北海道大学経済学部における啓発教育に長年に渡りご支援、ご協力を頂いた全ての方々から感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

35) 2006 年度(前期)北海道大学経済学部「経済・経営書購読」(学部教育、筆者担当) においても 2 名(NPO 『多』文化ネット 石川園代氏、雪印乳業(株) 堀川正和氏) のゲスト・スピーカーを招聘した。
ゲスト・スピーカーとの交流の累積から、多くの気づきを得ている。独自に企業内短期研修プログラム(インターンシップ) に参加、あるいはゲストの提案する国際交流プロジェクトにボランティアで参加する学生も出ている。ゲストの招聘による大学の「教室の現場化(フィールド)」を通して、ワークショップによる相互学習の場面への転換が、可能であることを、実証している。また 2006 年度(前期)北海道大学一般教育科目(1 年生向け) 「社会の認識」においては、ゲスト・スピーカーとして判読の名人といわれる清水雅男氏を招聘した。

清水氏のフィールドワークと「判読」(航空写真、人工衛星画像など) ならびに「地図化」の話は、若い学生達にフィールドにおける経験の重要性を、強く印象づけるものであった。
「自分の人生をかけて北海道の植生図を作る人」、
「すごい熱血的な人」(学生 FY コメント)
清水雅男 (1981) 「自然を読む」『採集と飼育』
Vol. 43 . No. 6 , pp. 330-333
清水雅男他 (1982) 『北海道植生図』日本造船振興財団
梅田安治・清水雅男 (2003.3) 『釧路泥炭地形成図』(社) 北海道土地改良設計技術協会発行
梅田安治・清水雅男 (2003.3) 『サロベツ泥炭地形成図』(社) 北海道土地改良設計技術協会発行
米山喜久治 (1993) 『探究学序説』 p. 183 文眞堂